

アルゼンティン・
ラ・プラタ大学獣医学部研究計画
終了時評価報告書

平成5年9月

国際協力事業団

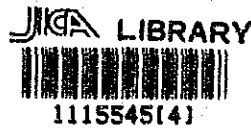
農開畜
JR
93-54

アルゼンティン・ラ・プラタ大学獣医学部研究計画終了時評価報告書

平成5年9月

701
279
ADL

アルゼンティン・
ラ・プラタ大学獣医学部研究計画
終了時評価報告書



平成 5 年 9 月

国際協力事業団

国際協力事業団

26712

序 文

アルゼンティン・ラ・プラタ大学獣医学部研究計画は、1988年12月15日に署名された討議議事録（R/D）に基づき、アルゼンティン国の主要産業の一つである畜産業の発展に寄与するため、ラ・プラタ大学獣医学部における研究活動を強化することを目的として、1989年3月1日から5年間の予定で協力が行われてきました。

今回、プロジェクトの終了を約7ヵ月後に控え、1993年8月9日から8月26日までの18日間、東京大学農学部獣医微生物学教室見上彪教授を団長とする評価調査団を派遣しました。

本調査団は、アルゼンティン側評価チームと合同で、活動実績、目標達成度等について総合的な評価を行うとともに、協力期間終了後の対応策等について協議・検討を行いました。

調査結果は、アルゼンティン双方の評価チームによる討議を経て、合同評価報告としてとりまとめられ、署名のうえ両国政府関係機関に提出されました。

本報告書はこの合同評価報告書をもとに日本側調査団としての調査及び協議の結果をとりまとめたものであり、今後広く関係者に活用され、本プロジェクト並びに関連する国際協力の推進に寄与することを願うものであります。

最後に、本調査の実施に当たりご協力を頂いたアルゼンティン政府関係機関及び我が国関係各位に対して、厚く御礼申し上げますとともに、本プロジェクトに対するなお一層のご支援をお願いする次第です。

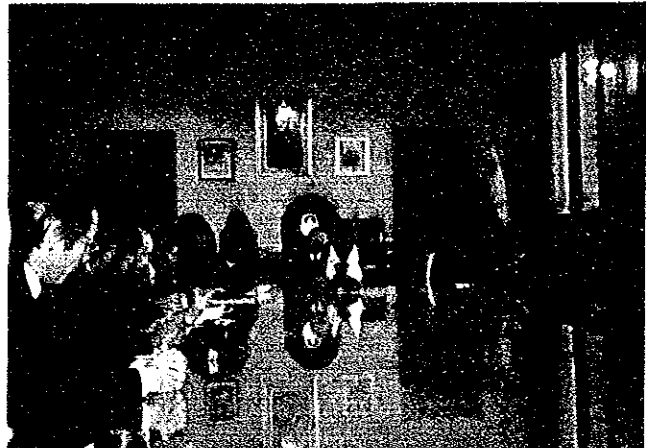
平成5年9月

国際協力事業団

理事 田口俊郎



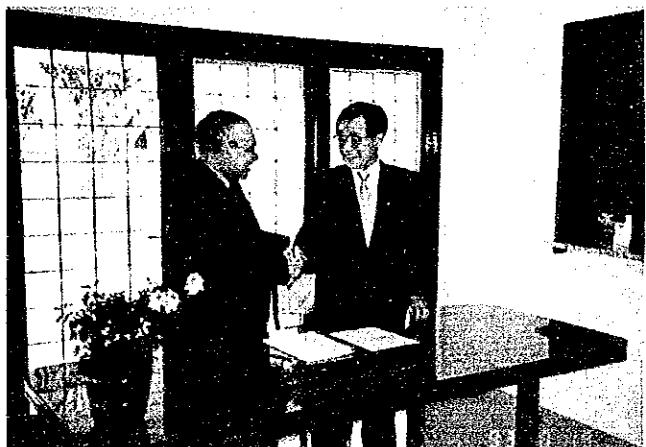
教育省表敬



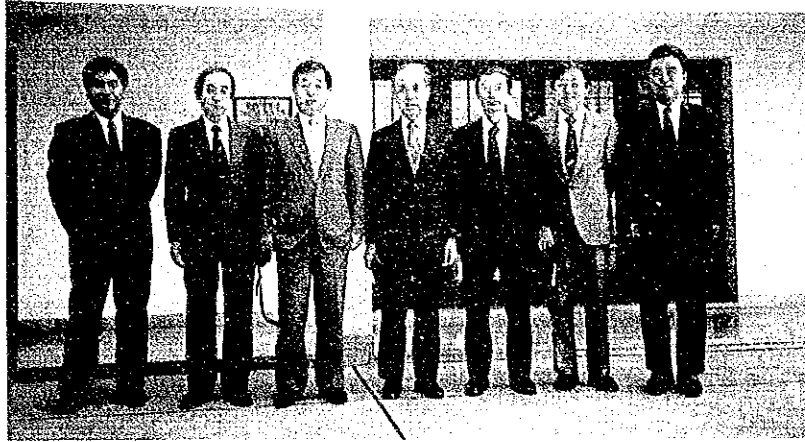
ラ・プラタ大学長 表敬



合同委員会

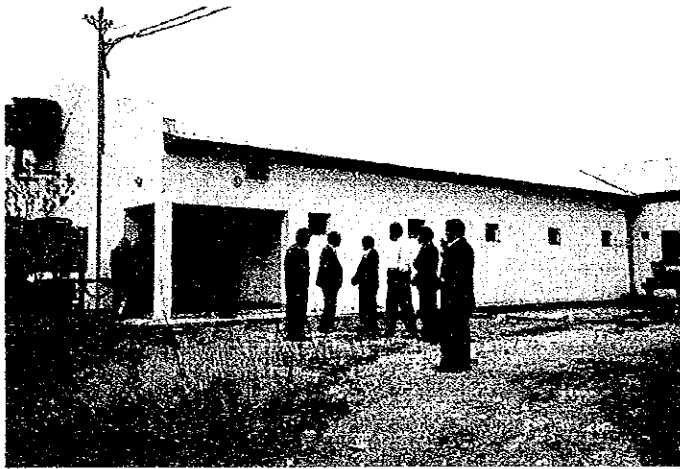


合同評価レポート署名



調査団員等

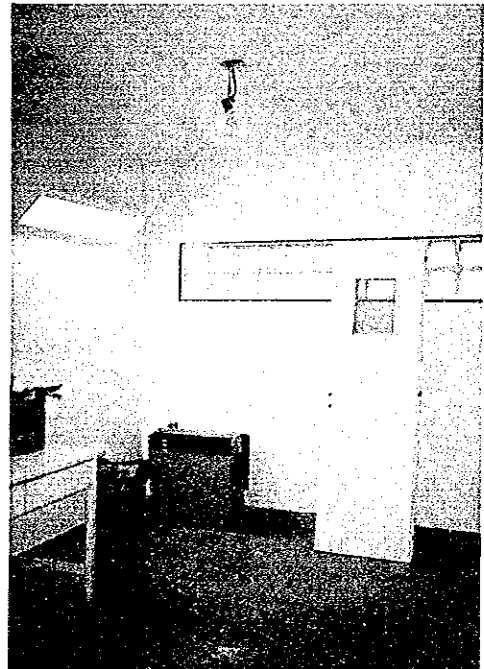
(左から、木部調整員、高橋リーダー、見上団長、
光岡専門家、久保団員、森団員、加藤団員)



実験動物舎

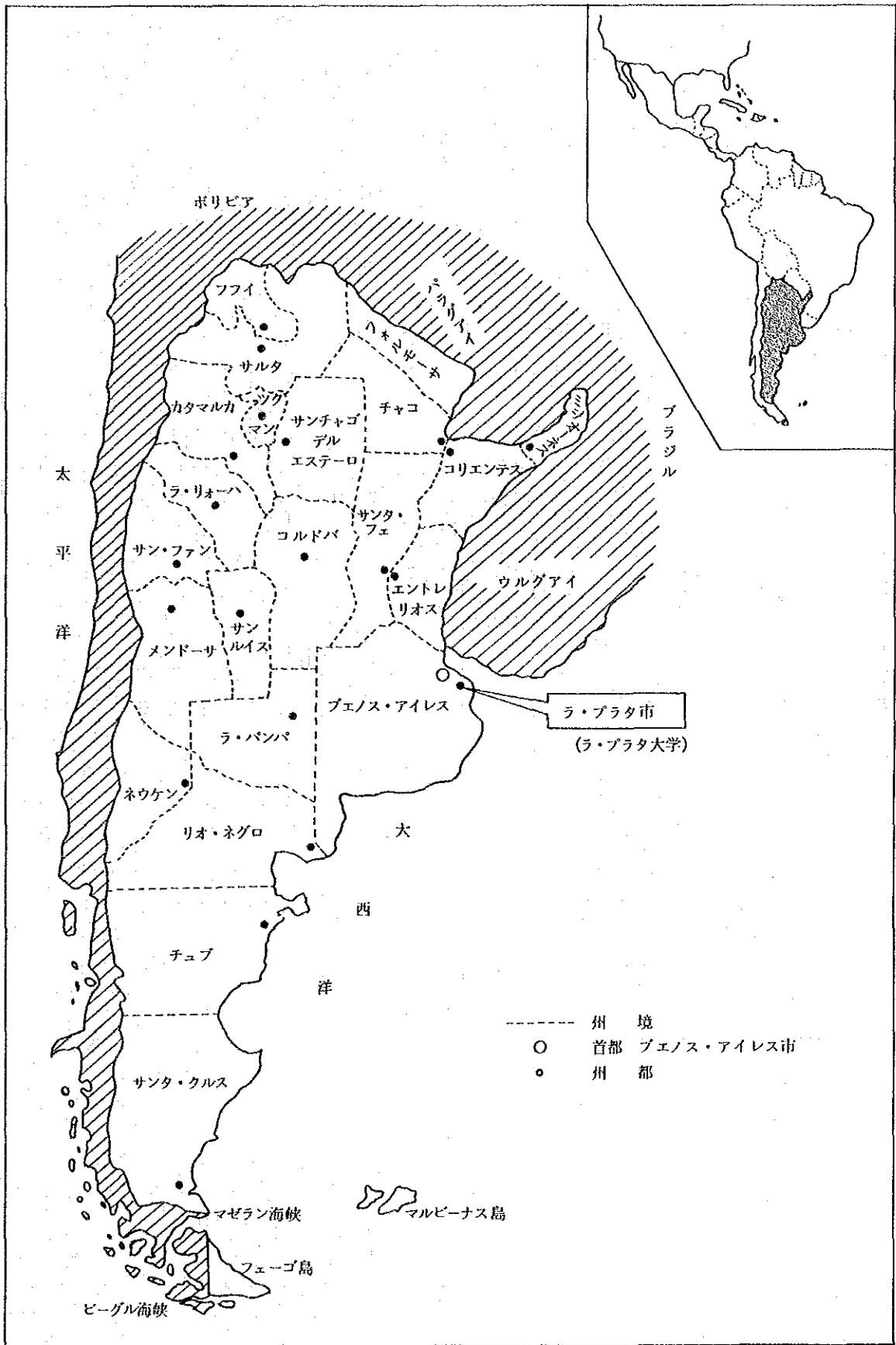


CEDIVE の実験室
(平成4年度の供与機材が未着の状況)

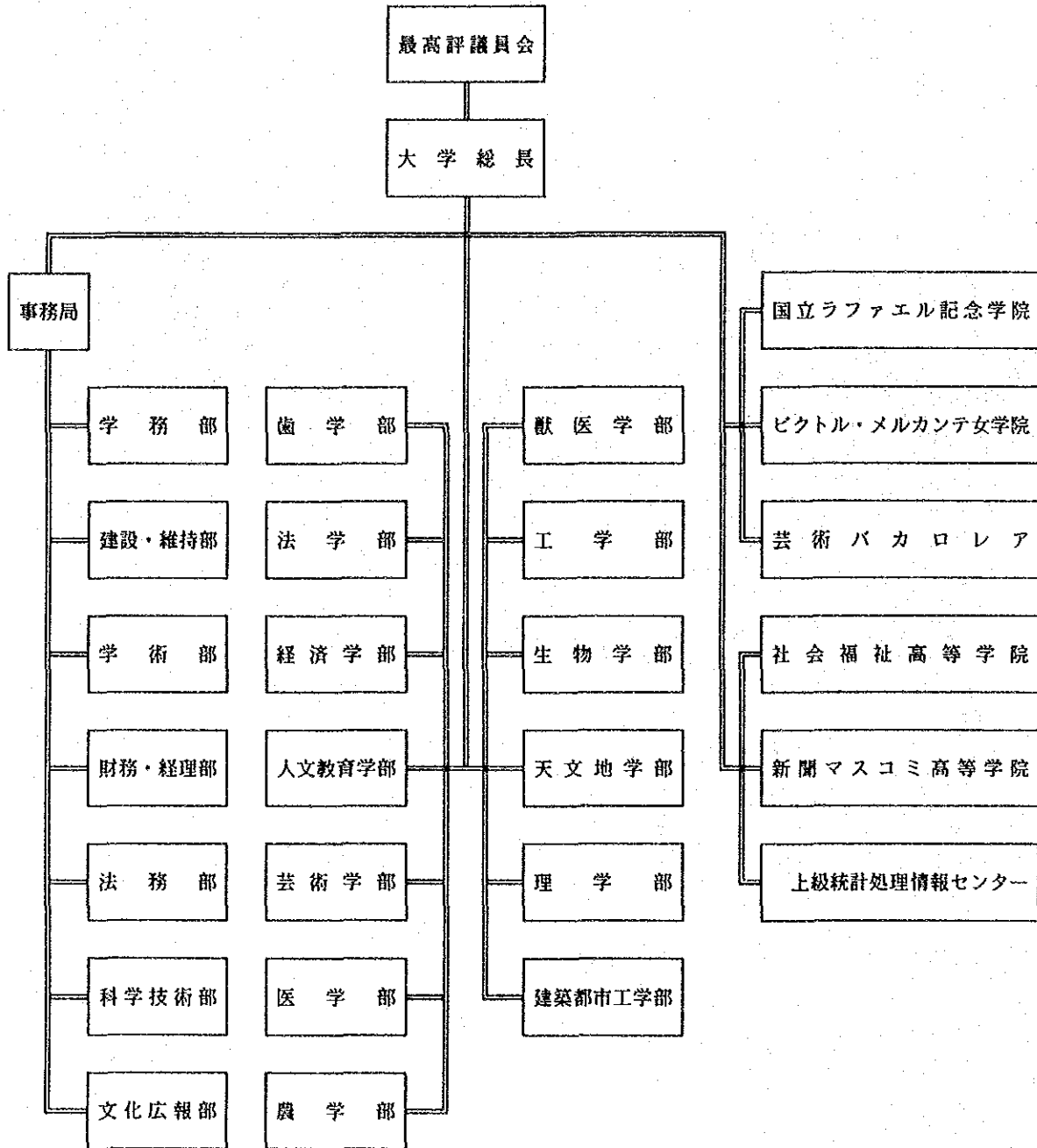


感染動物実験室の内装工事
(未完成)

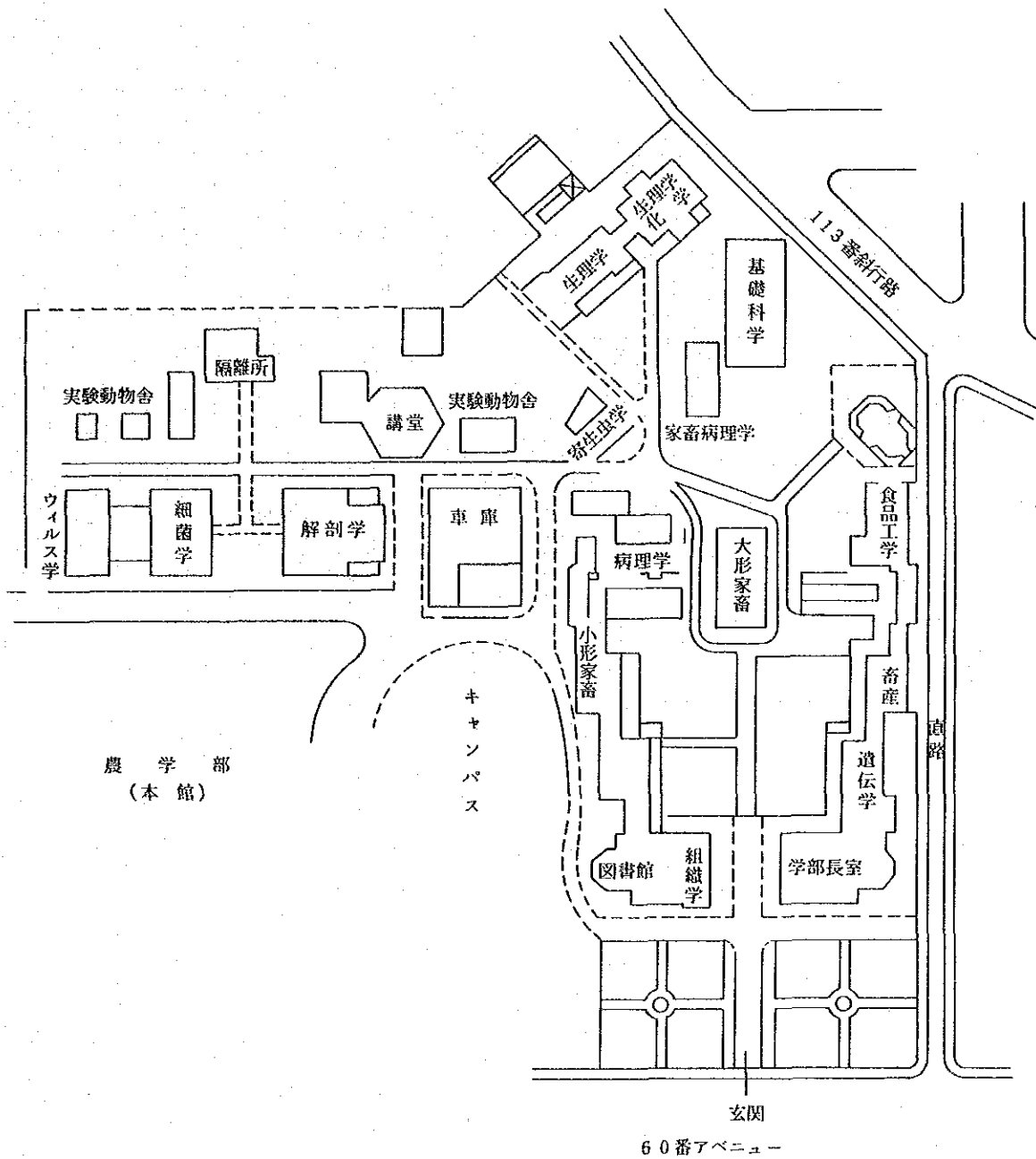
アルゼンティン共和国の行政区分



協 力 機 関 組 織 図



獣医学部配置平面図



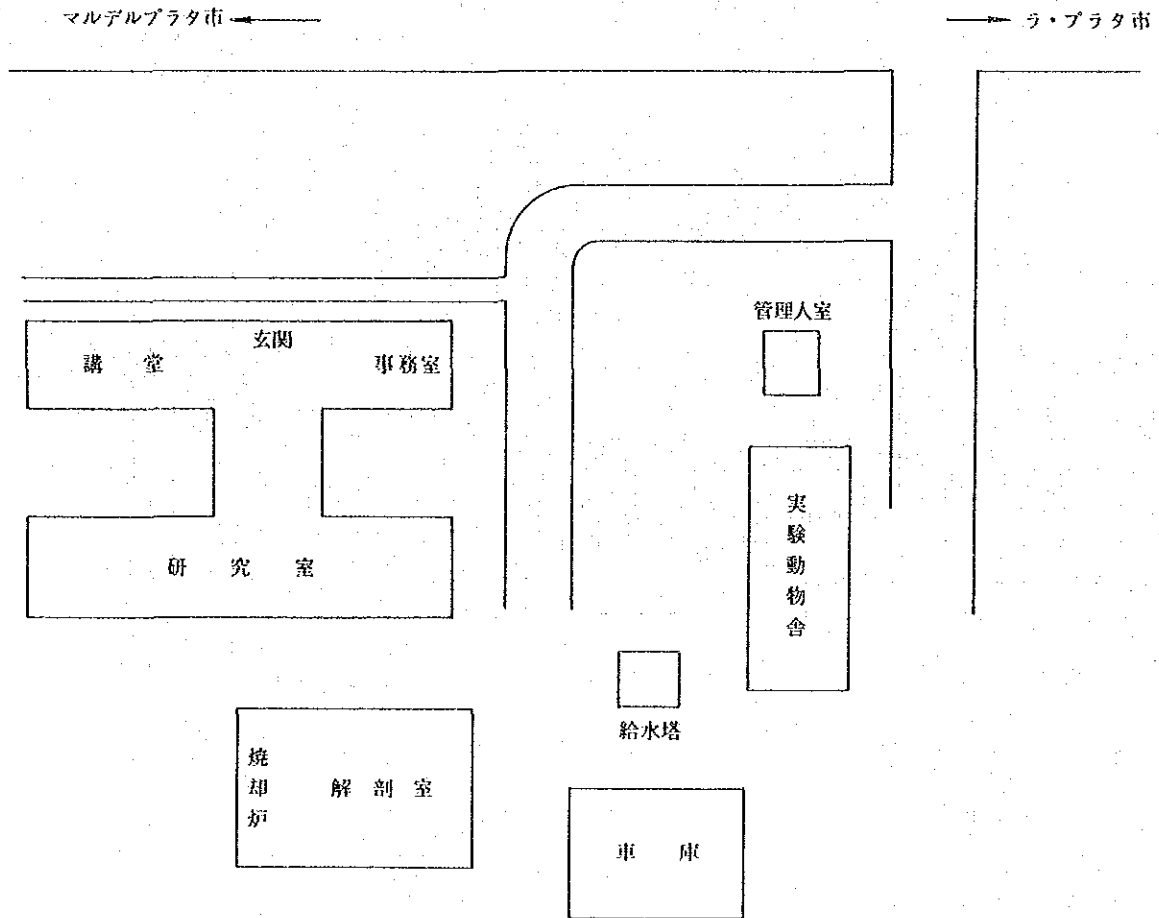
農学部
(本館)

キャンパス

玄関

60番アベニュー

チャスコムス診断研究センター（CEDIVE）配置図



目 次

序 文	
写 真	
プロジェクト位置図	
目 次	
1. 終了時評価調査団の派遣	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 調査団の構成	2
1-3 調査団の日程	3
1-4 主要面談者	4
1-5 終了時評価の方法	5
2. 要 約	7
3. 協力実施の経緯	8
3-1 相手国の要請内容と背景	8
3-2 プロジェクトの基本計画及び暫定実施計画（TSI）	9
3-3 協力実施プロセス	10
3-4 中間評価結果とフィードバックの状況	13
3-5 他の協力事業との関連性	13
4. 目標達成度	14
4-1 上位計画との整合性	14
4-2 案件目的の達成状況	14
4-3 プロジェクトの投入実績及び目標達成度	15
4-4 研究活動実績及び目標達成度	18
5. プロジェクトの効果	23
6. プロジェクトの管理運営体制	25
7. 自立発展の見通し	27
7-1 経済的自立発展の見通し	27
7-2 組織的自立発展の見通し	28
7-3 技術的自立発展の見通し	28

8. フォローアップの必要性	29
8-1 協力期間延長の要否	29
8-2 フォローアップの内容と方法	29
9. 評価結果総括	31
9-1 評価の総括	31
9-2 取るべき措置	32
9-3 教訓	32
9-4 提言	33
10. その他	36
10-1 教育省での打ち合せ結果	36
10-2 全体会議の様相	36
10-3 施設問題	38
10-4 合同委員会における大学長の発言要旨	38

付 属 文 書

- (参考1) プロジェクト組織図
- (参考2) 協議実施プロセス
- (参考3) インプット総括表
- (参考4) 派遣専門家技術移転一覧
- (参考5) 供与・携行機材の利用・管理状況
- (参考6) カウンターパート等主要関係者リスト
- (参考7) カウンターパート研修員一覧
- (参考8) フルタイム研究者数の推移
- (参考9) アルゼンティン側運営経費の負担
- (参考10) 研究業績の評価
- (参考11) 各研究室（センター）における研究水準
- (参考12) 獣医学部運営の卒後講習会の開催状況
- (参考13) ラ・プラタ大学獣医学部研究計画の流れ図
- (参考14) ロジカル・フレームワーク
- (参考15) プロジェクト方式技術協力終了時現況表
- (参考16) 終了時評価結果要約フォーマット
- (参考17) 終了評価結果総括表
- (参考18) 質問票及び回答
- (参考19) 各省会議資料及び議事録
- (参考20) アルゼンティン側F/U協力要請書
- (参考21) 畜産関係データ

別添資料

1. 合同評価レポート
2. 合同委員会ミニッツ

1. 終了時評価調査団の派遣

1-1 調査団派遣の経緯と目的

(1) 調査団派遣の経緯

アルゼンティン共和国政府は、同国の基幹産業である牧畜業発展の基礎となる家畜衛生分野について、ラ・プラタ大学獣医学部を拠点とした獣医学研究の強化を図るために、1987年7月我が国に対し、プロジェクト方式技術協力を要請した。

これを受けて、1988年4月に事前調査を、同年8月には長期調査員を派遣し、要請内容及びプロジェクト方式技術協力の実施に必要な事項について調査を行った結果、同年12月に実施協議調査団を派遣してアルゼンティン側関係者と協議を行い、12月15日「討議議事録(R/D)及び「暫定実施計画(TSI)」を署名し、1989年3月1日から5年間の協力が開始した。

本プロジェクトは、「家畜における微生物(細菌、ウイルス、真菌、原虫)感染症の診断のための病理学的・免疫学的研究活動」を統一テーマとし、以下の4つのサブテーマを設けている。

- 1) 病理形態学的基礎研究活動
- 2) 実験動物を活用した形態と機能に関する基礎研究活動
- 3) 感染症の宿主病態の整理・生化学的研究活動
- 4) フィールド適用を目指した総合的研究活動

さらに、それぞれのサブテーマに関する小テーマを、ラ・プラタ大学からのプロポーザルに基づき、逐年的に決定(プロポーザルを国内委員会等が学術面及び予算面の可能性から検討し、「ア」側との討議により決定)する方式をとり、それらの研究活動の協力することで、ラ・プラタ大学獣医学部における研究活動の強化を図ることを目的としている。

(2) 調査の目的

今回、94年2月28日をもって当初の5年間の協力期間が終了するため、下記の目的により評価調査を行う。

- 1) プロジェクト開始より、現時点までの実績(予定を含む)を調査し、その達成度を評価すること
- 2) 協力期間終了後のとるべき対応策について協議し、その結果を両国政府関係機関に勧告すること

1-2 合同調査団の構成

(1) アルゼンティン側

- ① Dr. Horacio Norberto GARCIA VALENTI
Assistant Professor of the Faculty of Veterinary Science,
The National University of La Plata
- ② Dr. Rogelio Enrique BRUNIARD
Academic Secretary of the National University of La Plata
- ③ Dr. Eduardo PONS
Vice-Dean of the Faculty of Veterinary Science,
The National University of La Plata
- ④ Dr. Jorge Rodriguez TOLEDO
Director of Management Office of Laboratory,
The National Service of Animal Health (SENASA)
- ⑤ Dr. Nestor AUZA
Vice-President of National Institute of Agricultural Technology

(2) 日本側

- ① 見上 彪 (総括)
東京大学 農学部獣医微生物学教室教授
- ② 杉田 信孝 (研究協力)
東京大学 農学部事務長
- ③ 久保 正法 (獣医学応用研究)
農林水産省家畜衛生試験場総合診断部病理診断研究室長
- ④ 森 裕司 (獣医学基礎研究)
東京大学 農学部獣医動物行動学教室助教授
- ⑤ 加藤 信夫 (計画評価及び業務調整)
JICA 農業開発協力部畜産技術協力課課長代理

1-3 調査団の日程

1993年8月9日(月)～8月26日(木) (18日間)

日順	月日	曜	行程及び内容
1	8/9	月	東京(19:00) RG 837——ロサンゼルス
2	10	火	→(サン・パウロ) RG 940→ブエノス・アイレス(12:00) 日本大使館表敬、教育省高等教育庁表敬、JICA事務所打合せ
3	11	水	(ナス・アルス → ラ・プラタ) 日本人加ジェチ-A との打合せ ラ・プラタ大学学長表敬、獣医学部長表敬及び打合せ 合同評価調査チーム打合せ
4	12	木	現地セミナー参加(研究活動の評価)
5	13	金	同上
6	14	土	CEDIVE視察
7	15	日	調査団員打合わせ(質問表の作成等)
8	16	月	午前 第1回学内全体会議(プロジェクト活動報告) 午後 学内施設調査
9	17	火	午前 分野別インタビュー 午後 第1回 合同評価委員会(評価レポートの作成)
10	18	水	午前 第2回 合同評価委員会(評価レポート案作成) 午後 プロジェクト関係者との調整
11	19	木	午前 第3回 合同評価委員会(評価レポートの仕上げ) 午後 第4回 合同評価委員会(合同評価レポート署名)
12	20	金	午後 合同委員会(合同評価レポート報告、ミニッツ署名)
13	21	土	(ラ・プラタ → ブエノス・アイレス) 現地調査報告書の作成
14	22	日	現地調査報告書の作成
15	23	月	日本大使館及びJICA事務所報告 ブエノス・アイレス(17:20) RG-941
16	24	火	→ロサンゼルス(8:00) (泊)
17	25	水	ロサンゼルス(13:50) NH-005
18	26	木	→東京(17:00)

1-4 主要面談者

(1) 経済公共事業省 農牧水産庁

家畜衛生研究所 (SENASA) 所長 Dr. Bernardo Cane

国立農牧技術研究所 (INTA) 局長 Ing. Carlos Torres

(2) 教育省

大学政策長官 Lic. Luis Del Bello

(3) ラ・プラタ大学

学長 Ing. Julian Luis Lima

① 獣医学部

獣医学部長 Dr. Alberto Ricardo Dibbern

ア側コーディネーター Dr. Edgardo Nosetto

セレクタリー Dra. Alicia Antonini (学部管理)

Dra. Maria Elisa Etcheverrigaray (大学院)

Dr. Carlos Juan Perfumo (獣医学研究)

各研究室主任 Dra. Lucila M. Venturini (寄生虫学)

Dra. Maria Elisa Etcheverrigaray (ウィルス学)

Dr. Eduardo Juan Gimeno (一般病理学)

Dr. Carlos Juan Perfumo (解剖・病理生理学)

Dr. Nestor Stanchi (微生物学)

Ing. Fernando Noel Dulout (遺伝学)

Dr. Angel Catala (生化学)

Dr. Eduardo Mariano Zaccardi (生理学)

Dra. Cecilia Carbone (実験動物学)

② チャスコムス診断研究センター (CEDIVE)

所長 Dr. Jorge Roberto Romero

(4) 日本側

① 日本大使館

大使 山本 学

参事官 宗内 誠人

② JICA事務所

所長 川上 礼司

業務第二課長 永野 征一

③ 日本人専門家チーム（長期専門家）

チームリーダー	高橋 英司
業務調整員	木部 彰二
微生物学	山本 正悟
ウィスル学	乗峰 潤三

1-5 終了時評価の方法

1-5-1 評価方法

日本・相手国双方の評価チームによる合同評価を行い、プロジェクトの当初計画、双方の投入実績、活動実績、プロジェクト実施の効果、管理運営体制等につき評価調査を行う。併せて、当初の協力期間終了後における対応方針についても検討し、これらの結果を合同評価レポートにとりまとめ、評価チームとして両国政府関係当局に提言する。

1-5-2 調査項目

(1) プロジェクトの当初計画

① 上位計画との整合性

案件選定時における上記計画（国家開発計画等）や農業政策との関連を捕え、プロジェクトの上位諸計画への寄与度について調査する。

② 当初計画の妥当性

主に、プロジェクト開始時に作成されたR/D及びT S Iに基づき、これまでの到達状況を考慮し、目標や計画設定の妥当性などを評価する。

(2) プロジェクトの投入

① 日本側の投入

専門家派遣、機材供与、研修員受入れ、調査団派遣、ローカルコスト負担等の事業について日本側の投入実績を調査し、計画と違いがある場合にはその原因について考察する。

② 相手国側の投入

土地・建物・施設、カウンターパートの配置、運営経費の負担等について相手国側の投入実績を調査し、計画と違いがある場合にはその原因について考察する。また、これらの投入の適切度についての評価も行う。

(3) プロジェクトの活動

主に、実施協議調査の際に作成されたR/Dのマスタープラン及びT S Iに定められ

た協力課題に沿って、実施状況を調査し、達成度を評価する。

(4) プロジェクトの管理運営体制

プロジェクト運営組織の行政組織上の位置付け、その行政能力を調査し、かつ上記(2)②の相手国側の投入の調査結果（とりわけ要人配置状況等）を基にして、現行の管理運営体制の適切度について評価する。

また、合同委員会等委員会の機構及びその活動についても評価する。

(5) プロジェクト実施の効果

プロジェクトの実施によって、目的に対してどのような効果が生じているか、或いは今後どのような効果が期待できるか、受益者の範囲を含めて可能な範囲で考察を試みる。

また、相手国側のカウンターパートや政府関係機関の計画・活動等にどのような影響を与えたかも本プロジェクトの効果であるので、この点についても考察する。

(6) 自立発展の見通し

協力期間終了後の自立発展の見通しを経済的・組織的及び技術的観点から、可能な範囲内で考察する。

(7) プロジェクト終了後の対応方針

当初の協力期間終了後、本プロジェクトがどうあるべきかについて考察し、日本側、相手国側がそのための取るべき対応策について、そのような結論に至った判断根拠を付して、評価調査団としての提言を行う。

(8) その他

その他重要と思われる事項について調査又は提言を行う。

1-5-3 評価作業プロセス

- (1) 93年3月16日付け文書で、プロジェクトに対し、評価レポート作成に必要な資料作成の指示を出す。
- (2) 93年5月27日、各省会議にて評価調査に係る対応方針等の決定。
- (3) 7月9日及び21日、団員打ち合わせを行い、評価レポート（素案）作成作業を行う。
- (4) 現地にて、質問票を作成する。
- (5) ア側評価メンバーと評価レポート（素案）について議論。
- (6) ヒアリング及び施設訪問を通じ、本レポートに加筆・修正を行う。
- (7) プロジェクトに対し、本レポートの内容について事前説明を行う。
- (8) 評価レポートの完成。

2. 要 約

- (1) 日本側は、R/D及びT S Iに従って、専門家の派遣、研修員の受入れ、機材供与、ローカルコストの負担等を通じ、プロジェクトの実施に努力した。
- (2) アルゼンティン側は、ラ・プラタ大学が財政難に直面しているにもかかわらず、スタッフ配置、中央実験等「Pabellon Nocard」の改修、他の関連施設の改修、電気・水道の供給問題の改善等について可能な努力を行った。
- (3) 評価の方法論に関し、研究課題が複数の研究室に関係していること、研究課題の実施期間が研究室によって異なること等の理由により、合同評価調査団は各研究室における研究活動を正確に評価することは困難であると考えた。
- (4) しかしながら、外部からの研究費獲得額及び人件費補填額、フルタイム教官数、科学論文・口頭発表数や卒後研修コースの開催及び外部サービス（診断サービス）等種々の要因に基づいて評価を行った。これら要因は、研究活動及び研究者の養成度合いを評価する上の指標と考えた。
- (5) これら指標に基づき過去5年間の評価を行った結果、ウィルス学及び病理学の各研究室の研究活動は高く評価され、遺伝学、生化学及び原中病学研究室でも満足すべき成果が得られた。生理学及び微生物学研究室では一応の目的が達成された。
- (6) しかしながら、実験動物学研究室においては、アルゼンティン国のハイパー・インフレーションの影響で、J I C Aによる実験動物舎の建設が大幅に遅延したことにより、当該研究室の研究活動の進展は十分とは言えない。
- (7) また、プロジェクト4年目の92年度から開始されたC E D I V Eにおける研究活動についても、当該年度の供与予定の機材の供与が遅れたため、本格的な研究活動は最終年度である93年度に開始されるものと期待される。

従って、合同評価調査団は、本プロジェクトのR/Dで規定されている5年間の協力期間終了後、以下の協力課題について、更に2年間のフォローアップ協力が必要であることを勧告することに合意した。

- (1) C E D I V E 周辺の家畜疾病の診断
- (2) 診断結果に基づいた家畜疾病の予防と治療
- (3) S P F 動物の遺伝学的、微生物学的モニタリングシステムの確立
- (4) S P F 動物の大規模コロニーの確立

更に、プロジェクトの研究協力の基本的サイトとしては、C E D I V E とラ・プラタ大学獣医学部の実験動物研究室を提案した。

3. 協力の実施

3-1 相手国の要請内容と背景

3-1-1 要請内容

アルゼンティン政府は、同国の畜産振興を図るため、国立ラ・プラタ大学獣医学部を拠点とし、家畜衛生を主とする研究強化及び人材養成を目的として、下記の内容のプロジェクト方式技術協力を我が国に要請してきた。

(先方要請内容)

- 協力課題： 1) 重要家畜疾病の疫学調査
2) 重要家畜疾病の診断技術の向上
3) 重要家畜疾病の予防及び予防技術
4) 食品衛生の向上
5) 豚の効率的飼養

専門家派遣：長期専門家 10名

{ ウィルス学、細菌学、寄生虫学、病理学、実験動物、
臨床、食品衛生（乳製品・卵）、養豚 }

短期専門家 数名

研修員受入：年間5名

機材供与：超遠心分離機、電子顕微鏡、各種顕微鏡、天秤、冷凍器等

3-1-2 要請の背景

- (1) アルゼンティンは世界有数の牧畜国で、広大な湿潤パンパでは家畜生産と穀物生産がなされ、同国の輸出高の80%は牛肉、皮革や加工品、小麦、大豆、こうりゃん等の農畜産物が占める。
- (2) 同国はより一層の牧畜振興を図り、畜産物の輸出を拡大し、外貨獲得による経済の安定化を目指しているが、各種家畜疾病が大きな阻害要因となっており、最も経済的被害が大きいのは「口蹄疫」である。口蹄疫については、リオ・デ・ジャネイロに汎南米口蹄疫センターを設立し、南米諸国が参加して大陸規模で撲滅対策を進めている。その他、ウィルス性、細菌性疾病や寄生虫等、重要な疾病対策も急務である。
- (3) 日本は、1985年3月末より、ラ・プラタ大学獣医学部ウィルス学教室に、個別専門家を派遣し、基礎的ウィルス病診断技術の確立を行い、大きな成果を上げ、高い評価を受

けた。

- (4) 今般、同国で最も歴史があり（創立後 105年）、過去近隣国よりの留学生を受入れ（大学へ毎年 100人、内獣医学部10人位）実績を持ち、中南米各国に指導的役割も果たしているラ・プラタ大学獣医学部を拠点とし、家畜疾病対策に係る技術向上、畜産技術者の育成を目的とするプロジェクト方式技術協力の要請がなされた。

3-2 プロジェクトのマスタープラン及びT S I

(1) プロジェクトの目的

アルゼンティン国の主要産業の一つである畜産業の発展に寄与するため、ラ・プラタ大学獣医学部における研究協力を強化することを目的とする。

(2) 協力課題

本プロジェクトは、「家畜における微生物（細菌、ウィルス、真菌、原中）感染症の診断のための病理学的・免疫学的研究活動」を統一テーマとし、以下の4つのサブテーマを設けている。

- ① 病理形態学的基礎研究活動
- ② 実験動物を活用した形態と機能に関する基礎研究活動
- ③ 感染症の宿主病態の生理・生化学的研究活動
- ④ フィールド適用を目指した総合的研究活動

(3) 協 力 期 間：(R/D) 1989年3月1日～1994年2月28日

(4) 所 在 地：ブエノス・アイレス州ラ・プラタ市

(ブエノス・アイレス市から南東約70km)

(5) 先方関係機関：① ラ・プラタ大学獣医学部

(The Faculty of Veterinary Science, The National University
of La Plata)

② チャスコムス診断研究センター

(Centre of Diagnostic Investigation of Veterinary :CEDIVE)

③ サンタ・カタリーナ附属牧場

(Santa Catalina Experimental Farm)

(6) 我が方協力機関：文部省（東京大学等）、農林水産省

3-3 協力実施プロセス (参考2)

プロジェクト開始後、各調査団により提言された事項又はプロジェクト実施上の留意点は以下のとおり。

3-3-1 R/D調査団 (88.12. 8~12.20)

- (1) 確固たる研究組織をつくるため、C/Pを可能な限り早めに受け入れ、受け入れ先で派遣予定専門家と共に研究活動を開始することが肝要。このことにより、帰国研修員とそのパートナーの日本人専門家を軸とする研究組織の確立が図られる。
- (2) 年次別に開始される研究テーマにかかる機材の到着に合わせて専門家派遣を行うこと。
- (3) 特に供与予定の電子顕微鏡の保守管理については十分注意を払い、プロジェクト実施中はもとより、終了後も使用可能な状態を維持することが重要。このため、専門の技術者(機材保守管理)を養成する必要がある。
- (4) 消耗品類を自助努力で捻出して研究活動が遅滞なく進行するよう、絶えず促すことが肝要である。研究活動が活性化すれば、大学の教官がア国の科学研究費を独自で獲得できるようになる。
- (5) C/P研修員候補者の順位は先方の責任者と(毎年派遣される)調査団との共同インタビューにより決定する方法が最も適切である。
- (6) 文部省国費留学生の受け入れは、研究活動の強化につながる。
- (7) 小テーマの決定は、大学から提出されるプロポーザルに対して、日本側が鋭意検討した後、カウンター・プロポーザルの形で合同委員会に提出し決定される。
- (8) 研究成果の評価は、毎年度末に提出される研究報告書の内容を検討することによって行う。また、この評価結果により次年度の研究継続の適否を判定する。

3-3-2 計画打合せ調査団 (89.12. 4~12.16)

- (1) 原中、病理、ウイルス、細菌の各研究室で研究が開始されたが、いずれの部門においても、平成元年度供与予定の研究用機材が到着していないため、研究に不可欠な消耗品(試薬等)は、専門家の携行機材又は東京大学からの無償供与によって賄っている。
- (2) C/Pの研究姿勢はいずれの分野においても熱心であり、全く問題はない。
- (3) 研究レポートは、各年度末に日本側に提出されることが、協議において確認された。
- (4) C/Pと要員は、R/D及びT S Iに従って、すでに配置されている。ただし、保守

管理要員は配置されていない。

- (5) ア国では、89年初めから経済状況が極端に悪化し、ハイパーインフレーションが進行し、メナム大統領が就任した7月のインフレ率は、196%に達した。この大統領の就任以降、国立大学等の公共部門への予算が大幅に削減された。すなわち、国立大学については、人件費は支給されるが、研究費等については削減の対象とされ、研究活動の実施は極めて困難な状況にある。
- (6) ラ・プラタ大学においては、89年度の予算が12月になっても正式に交付されず、獣医学部関係では暫定経費という名目で83万オーストラルが執行されたが、98%が人件費に使われ、研究活動等の実施は付属牧場の収益と各研究室のサービス業務で得た収益の20%を充てて賄われている（中でも、ウイルス学研究室は自助努力による研究費捻出に最も熱心な研究室である。）。
- (7) 最重要課題であるア側による中央実験棟（微生物学研究棟）の改修は全く目処がたっていない。
- (8) 90年2月導入予定の電子顕微鏡は最重要機材であることから、中央実験棟のうち電子顕微鏡設置室のみを早急に改修する必要があるため、この工事はJICAの応急対策費により実施されることとされた（空調機器の設置については、ア国の負担）。
- (9) 実験動物舎の建設はJICAのモデルインフラ整備事業により実施されることとされているが、現在、詳細設計と工事費の見積りが行われている。90年度早々にア側より正式要請が出される見込みである（建設工事契約はJICA事務所長と現地業者との間で締結し、施工管理はラ・プラタ大学が行う予定）。
- (10) 十分な電気容量を確保するため自家発電機を設置する必要性が確認され、獣医学部よりJICAの予算措置の可能性について検討要請があった。
- (11) 今後の研究活動の活発化にともない、必要とされる蒸留水の量が増えることが予想されるため、蒸留水製造装置の確保も検討する必要がある。

3-3-3 巡回指導調査団 (90.11.28-12.10)

- (1) 中央実験棟の電気と水の安定供給が未整備である。電子顕微鏡は設置された。
- (2) 応急対策費により、中央実験棟内の電顕室改修工事が完了した。
- (3) 厳しい経済状況にもかかわらず、89年度31,174ドル、今年度（1-9月まで）13,678ドルの予算措置を大学側が行った（電子顕微鏡室の空調施設工事に係る経費、5,000ドルを含む）。

- (4) モデルインフラ整備事業により実験動物舎を建設することとされているが、ハイパーインフレーションのため工事費が40%も値上がり、それゆえ、部屋数を減らし、空調の設置は取り止める等の計画の縮小を図った。
- (5) 多数のC/Pが配置されているが、現実の実験研究に携わることができる人員は極めて少数であること、及びフルタイムの者が少ないことが研究活動の推進の遅滞を招いていると考えられる。

3-3-4 巡回指導調査団 (91.10.9-10.21)

- (1) 過去3年間の基礎的研究活動により、基盤的技術の導入が行われた。このことにより、次年度からの応用分野への研究へスムーズに移行できることが確認された。
- (2) 水、電気の供給については、大学側の努力により改善されつつある。
- (3) 供与機材はよく管理されており、故障・使用不能といった問題はない。
- (4) CONICET (国立科学研究審議会)、CIC (ブエノスアイレス州科学研究委員会) 等、国及び州からの支援が強化されており、プロジェクト開始時に26名であったフルタイムの教官が49名に増加するなど、改善の努力が払われている。
- (5) 学部長・副学部長の下にセクレタリーという職種があり、獣医学部の教官が日本では事務長の職種を兼ねている。設備・備品の調達・修理はセクレタリーを通じて副学部長が決裁を行うこととなっている。
- (6) ハイパーインフレーションのために、年度当初に予算が組めない。

3-3-5 巡回指導調査団 (92.10.14-10.26)

- (1) 大学側の自助努力による、放射性同位元素取扱のための建物の改修、原虫学講座の研究室改修、微生物学講座の研究室改修、遺伝学講座の拡充及び研究室の改修、実験動物施設に対する自家発電の設置 (本年度予定) 等は特記に値する。
- (2) 講義、実習の時間に合わせて多数の教官がパートタイマーとして雇用されており、一見多数の教官が在籍するにもかかわらず、研究に時間を割ける者の比率がきわめて少ない。
- (3) 従って、どれだけのフルタイム教官が存在するかが、研究活動を知るための一つの端的なパラメータとなる。
- (4) 若手教官を中心に、26名 (内2名は国費留学生) を研修員として受入れている。そのうち、20名弱がア国へ帰国しているが、研修前にパートタイマーの身分であった者のほ

とんどが、帰国後フルタイム教官となっている。

3-4 中間評価結果とフィードバックの状況

過去の調査団による主な提言に対するフィードバックの状況は以下のとおり。

主 な 提 言	フ ィ ー ド バ ッ ク の 状 況
(1) アルゼンティン人の機材保守管理専門家の配置	当初、1名の機材保守専門家を雇用したが、大学側より給料がなかなか支給されず、専門家は5ヶ月程度で退職し、それ以後配置されていない。なお、電子顕微鏡の保守管理は、Dr. Miguel A. PETRUCCEI I が行っている。
(2) 消耗品類の購入等を含むローカルコスト負担	プロジェクト運営費のうち約40%を負担(推定値)。試薬類、ガラス器具類等消耗品については、一部JICA側が負担している。実験動物学研究室及び微生物学研究室の負担は不十分。
(3) 文部省の国費留学生受け入れ制度の活用	これまで3名のC/Pが文部省の国費留学生として来日している。
(4) 中央実験等の改修	90年12月に中央実験棟の改修工事が完了した。
(5) 自家発電機の設置	93年7月末に実験動物施設内に自家発電機(2万ドル)が設置された。ただし、配線工事は未了。
(6) 電子顕微鏡室の空調工事	91年6月に電子顕微鏡室の空調施設工事が完了した(5,000ドル)。
(7) フルタイム研究者の増員	プロジェクト開始時32名であったフルタイム研究者は、93年8月現在、54名に増員された(参考8)。C/P研修を受ける前、パートタイム待遇であったC/Pは、帰国後、全員フルタイム研究者に昇格している。 遺伝学、ウィルス学、生化学及び病理学の4研究室は、
(8) CONCEPT等外部からの研究費獲得	遺伝学、ウィルス学、生化学及び病理学の4研究室は、外部より研究費を獲得している。

3-5 他の協力事業との関連性

特になし。

4. 目標達成度

4-1 上位計画との整合性

(1) アルゼンティンの農業開発計画

アルゼンティン国政府は、1984年10月、短期間のうちに農業部門の活性化を図り、国内経済の基盤の再生に寄与させることを目的として、国家農牧業計画（PKONAGRO、1984～87）を策定した。このなかでは、アルゼンティン農業の中心であるパンバとそれ以外の地域に区分して、将来の農業活性化戦略を示している。コリエンテス州の関係するパンバ以外の地域について、その基本戦略を示すと以下のとおりである。

- ① 地域の特産的な農産物を、需要に応じて増産する。同時に、穀物、油料作物等の中から、伝統的産物に代替するものを選定、奨励する。また、畜産の近代化、強化および種子産業の促進を行う。
- ② 生産コストの削減、品質改良および海外市場における競争力の改善を目的として輸出用農畜産物（トリ、ブタ、穀物等）の生産技術を近代化する。
- ③ 農業基盤を拡大するため、生産者に適切なインセンティブを与えることにより、生態系と調和した農地開発を進める。
- ④ 貯蔵施設および輸送インフラストラクチャの整備を進める。
- ⑤ 流通段階において生産者、農業の交渉能力を増大させるため、技術革新、農業投資をねらいとする信用政策を推進する。
- ⑥ 小農経営が多く、小農に係る構造的な問題を抱えている地域において、農村総合開発プログラムを計画・実施する。

(2) アルゼンティンの農業政策

アルゼンティン経済全体における農業部門の重要性にもかかわらず、政府の農業一般に対する援助政策は基本的には存在しない。

4-2 案件目的の達成状況

- (1) 本プロジェクトの目的は、アルゼンティン国の主要産業の一つである畜産業の発展に寄与するため、ラ・プラタ大学獣医学部における研究活動を強化することを目的とする。また、日本側の技術協力の目的は、ラ・プラタ大学における研究者の養成であるとしている。
- (2) 評価の方法論に関し、研究課題が複数の研究室に関係していること、研究課題の実施期

間が研究室によって異なること等の理由により、研究室における研究活動を正確に評価することは困難であるが、外部からの研究費獲得額及び人件費補填額、フルタイム教官数、科学論文・口頭発表数や卒後研修コースの開催及び外部サービス（診断サービス）等種々の要因によって、研究活動及び研究者の養成度合いを評価する上の指標と考えた。

- (3) これら指標に基づき過去5年間の評価を行った結果、ウィルス学及び病理学の各研究室の研究活動は高く評価され、遺伝学、生化学及び原虫病学研究室でも満足すべき成果が得られた。生理学及び微生物学研究室では一応の目的が達成された。
- (4) しかしながら、実験動物学研究室においては、アルゼンティン国のハイパー・インフレーションの影響で、JICAによる実験動物舎の建設が大幅に遅延したことにより、当該研究室の研究活動の進展は十分とは言えない。
- (5) また、プロジェクト4年目の92年度から開始されたCEDIVEにおける研究活動についても、当該年度の供与予定の機材の供与が遅れたため、本格的な研究活動は十分とは言えない。
- (6) しかしながら、実験動物学研究室では、SPF動物の配布活動が開始されてこと、また、CEDIVEにおいても、現在に至るまで地域の獣医師を対象とする講習会を開催したり、診断サービスが行われている状況に鑑みれば、2年間のフォローアップ協力を行えば当初の技術協力の目的が達成されるものと思慮される。

4-3 プロジェクトの投入実績及び目標達成度（参考3）

4-3-1 日本側投入実績

(1) 専門家の派遣（参考4）

T S I 上、日本側はチームリーダー及びコーディネーターに加えて、以下の分野の専門家を派遣しなければならないことになっている。

- ① 病理形態学
- ② 実験動物学
- ③ 生理学、薬理学及び生化学
- ④ 微生物学

短期専門家については、T S I 上、具体的な派遣分野について定められておらず、必要が生じた場合に派遣し得るとされている。

本プロジェクトでは、より具体的な専門家の派遣計画は、ラ・プラタ大学より提示される「研究プロポーザル」と、これに対する日本側の国内委員会より提示される「カ

ウンタープロポーザル」について十分な討議を行った上で、合同委員会において決定されてきた。

過去、37名の日本人専門家（長期10名、短期27名）が毎年の合同委員会で定められる年次計画（annual work plan）に沿って派遣された。

(2) 研修員受入れ

現在に至るまで、合計26名の研修員が受入れられた。なお、本年10月には、ラ・プラタ大学のリマ学長が準高級研修員として来日することになっている。これら研修員は、ラ・プラタ大学において、manpower developmentに貢献した。

これら、C/P研修に加えて、3名の研修員が文部省の国費留学生として来日している。

これらの研修員候補の多くは、JICA調査団が来アの際、面接をした上で決定されている。

T S I上は研修員受入れに関し、特別な約束はしていないものの、専門家派遣計画と同様に合同委員会において、本計画の詳細が決定されてきた。

研修員受入れは年次計画に基づいて適切に実施された。

(3) 機材供与

1992年度までに、総額約 234百万円の機材が供与された。93年度は30百万円の機材が供与されることになっている。

これら機材の利用状況については、2～3の機材が故障等により利用不能な状況にあったが、本年4月13日～18日にかけて、JICAの機材維持調査団がプロジェクトを訪問し、主要機材の修理は現在のところ完了している。総体的に供与機材の利用状況は良好である（参考5）。

(4) ローカルコストの負担

1989年度に、応急対策費（約4百万円）により、中央実験棟「Pabellon Nocard」の改修が行われた。

また、1990年度のプロジェクト基盤整備費（モデルインフラ整備費）、約27百万円により、実験動物舎の建設が行われた。しかしながら、1989年初頭からのア国内の不測のハイパー・インフレーションにより建設費が高騰し、この建設工事は大幅に遅れた。このため当初のJICA予算では建設工事を完了できなくなり、計画の縮小等の措置をとったが、不足分はラ・プラタ大学側の予算によりまかなわれ、施設はほとんど完成している。

更に、1991年度及び93年度にはJICAのセミナー開催費（総額約4百万円）を利用して、2回のセミナーが開催された。

4-3-2 アルゼンティン側投入実績

(1) スタッフ配置（参考6及び7）

アルゼンティン政府は、プロジェクトの円滑な実施のために必要なスタッフを配置することについて約束している。R/DのAnnex IVにおいて、必要なア側スタッフは以下のように分類されている。

- ① プロジェクト・マネジャー
- ② コーディネーター
- ③ カウンターパート
- ④ 実験及び技術補助員
- ⑤ 事務職員
- ⑥ 圃場職員

一時期、微生物学研究室の主要なC/Pが不在であったため、嫌気性細菌病の研究の進展が遅れたこともあった。

現在、21名のC/Pが配置され、その全てがフル・タイム教官である。現在のところ、スタッフ配置はプロジェクトを円滑に実施する上で十分であると推定される。

また、特筆すべきことは、日本で研修を受けた全てのC/Pが、主要なフル・タイム研究者又は事務官としてこのプロジェクトに積極的に関与していることである。

このため、ア側のスタッフ配置は正当に行われたものとみなされる。

(2) 土地・建物及び施設

実験動物舎の建設のために必要な土地の提供を含めプロジェクトに必要な土地・建物及び施設はア側により十分に提供された。

(3) 運営費

ア側は、C/P及び事務・技術職員の役務費を確保するために必要な措置を講じた。財政難にもかかわらず、ア側は研究に必要な材料の提供及び電気・水の供給に最大限の努力を行った。

総額 221,418ドルが大学の運営費（機材費、維持・管理費等、ただし、職員給与は除く）に使われた（参考9）。ア側は、プロジェクトのローカルコストのうち約40%を負担したものと推測される（JICAのローカルコスト事業に係る経費負担額及びア側運

賞費負担額から推定)。

また、大学側は中央実験棟「Pabellon Nocard」の回収、自家発電機の購入、電顕室のエアコンの設置等施設の改善において様々な努力を行った。

化学薬品、試薬類、ガラス器具、飼料等の消耗品については、ア側の負担により購入したものもあれば、JICAの負担により購入したものもある。

遺伝学、ウィルス学、生化学及び病理学の研究室については、各研究室における研究活動を通じ、外部からの研究費を獲得した。その総額は48,500ドルであった。

4-4 研究活動実績及び目標達成度

各研究室で実施された研究活動の進捗状況及び目標達成度は、参考10に記されている(研究水準の比較については、参考11を参照)。

4-4-1 病理・形態学に関する基礎的研究活動

(1) 嫌気性細菌による疾病に関する研究

① 初年度(1989)

ニワトリ及び豚からマイコプラズマの分離と同定に関する技術を導入した。

② 2年次(1990)

健康な子牛及び牛から *Campylobacter* sppの分離及びラ・プラタ地区でエンテロトキセーミアの疑いがある牛と鶏から *Clostridium perfringens*の分離を1990年10月から行った。鶏、鳩、マウス及びラットから *Mycoplasma* sppの分離も併せて実施した。

③ 3年次(1991)

ブエノス・アイレス地域の家畜及び鶏から *Campylobacter* sppを分離した。

新生子牛における腸内細菌叢の樹立及び *Campylobacter* spp の侵入に関する研究を行った。家畜、家禽及びヒトの気道及び尿生殖器からの *Mycoplasma* の分離・同定を行った。

④ 4年次(1992)

*Campylobacter jejuni*の3株を下痢患者から分離した。この株の病原性を乳飲みマウスに胃内授与して検討した。しかし、*Campylobacter* は胃腸管から回収されず、また胃腸フローラは変化しなかった。

(2) トキソプラズマ症に関する研究

① 初年度 (1989)

豚におけるトキソプラズマ症に関する血清学的調査を実施したところ、約30%の豚が *Toxoplasma gondii* に感染していた。

② 2年次 (1990)

血清学的検査、猫における *T.gondii* Beverley株の感染の再現試験及び *T.gondii* の家禽からの分離を行った。

抗 *T.gondii* 及びヒツジ抗 IgG血清を作出した。IgG をクロマトグラフィーで精製した。

抗 *T.gondii* 抗体を検出するウレアーゼ抱合抗体を用いた新しい ELISAを開発した。

③ 3年次 (1991)

山羊、ヒト及び豚の血清をラテックス凝集テストと間接蛍光抗体法を用いて検討した。

T.gondii が豚肉から分離された。

山羊及び牛の IgMの精製を様々な生化学的手法を用いて検討した。

④ 4年次 (1992)

牛バベシア症及び馬バベシア症に関する研究を開始した。

T.gondii 感染に関する寄生虫学的及び血清学的調査を成豚で行った。マウスと猫に放射線を照射した。*T.gondii* を接種した。猫における慢性トキソプラズマに対するマイコトキシンの影響を血清学的に検討した。

イムノブロットィング及び免疫沈降反応の技術を導入した。猫及び豚から分離された *T.gondii* をマウスに接種した。組織内の *T.gondii* を検出する間接免疫イムノペルキオキンダーゼ法を導入した。

(3) ウイルス病に関する研究

① 初年次 (1989)

ウマヘルペスウイルス (EHV) 及びウマインフルエンザウイルス (EIV) を分離した。馬伝染性貧血及び牛白血病の、商用の診断抗原を作り出した。

② 2年次 (1990)

馬・豚及び牛疾病の野外側の診断を行った。

EHV、ブタヘルペスウイルス (SHV)、EIA、ブタインフルエンザウイルス (SIV)、馬伝染性貧血ウイルス (EIAV) 及び牛白血病ウイルス (BLV) に関する研究を行った。

③ 3年次(1991)

EHV、SHV、EIV、SIV、EIAV及びBLVに関する研究を引き続き実施した。

SAVとEIVに対するモノクローナル抗体を作製した。

オーエスキー病に関する疫学的研究をELISAを用いて行った。

寒天ゲル内沈降用のBLVとEIAV抗原を作製した。

SHV-1のDNA配列を検討した。

EHV-1とSHV-1の蛋白質をSDS-PAGEとイムノブロッティング法を用いて解析した。

④ 4年次(1992)

2株の新しいEHV-1を野外材料から分離した。

EHV-1とEHV-4の2株の参照株と14のアルゼンティンEHV-1株の蛋白質を精製した。間接ELISAを開発し、中和試験と比較した。血球凝身及び血球凝身阻止試験をアルゼンティンEHV-1株を用いて開発した。125野外馬血清をウイルス中和試験で検査した。

1株のSHV-1が野外側から分離された。650の野外血清についてオーエスキー病の診断にブロッキングELISA法を応用した。

SAV-1感染MDBK細胞由来の飽和溶解物を糖蛋白質の研究用に精製した。

(4) 感染症の病理学的及び組織病理学的研究

① 初年時(1989)

A B C法、レクチン組織化学染色及び電子顕微鏡用標本作製技術を導入した。

② 2年次(1990)

一般的及びレクチン免疫組織化学法を野外及び実験材料へ応用した。

電子顕微鏡を診断に応用した。

③ 3年次(1991)

家畜疾病を新しい免疫組織化学、レクチン免疫組織化学及び電子顕微鏡により検討した。

④ 4年次(1992)

免疫組織化学及び電子顕微鏡の技術が確立された。

4-4-2 実験動物を用いた形態学的及び整理学的研究に関する基礎的研究活動

この課題は2年次(1990年度)から開始した。

(1) 実験動物における遺伝子応答の修飾、遺伝子発現及び遺伝子操作の研究

① 2年次 (1990)

低蛋白飼料とアルコール摂取の影響をマウスの雌雄で検討した。低蛋白飼料で飼育した動物は染色体障害の程度が高く、またシクロオスファミドの突然変異原に対する感受性も高かった。

② 3年次 (1991)

[遺伝子研究室]

主に研究活動は、異なる動物種における細胞遺伝的解析、遺伝的解析及び遺伝的毒素学に対する樹立細胞の維持と利用及びリンパ球の短期培養の利用であった。

[実験動物研究室]

ラット、モルモット、鶏、ウサギ、犬、馬及び *Myocastor coypus* の心電図技術を導入した。 *Salmonella* spp. *Pasteurella* spp. *Pseudomonas aeruginosa*. *Shigella*及び *Bordetella bronchiseptica* に対する細菌学的モニタリングシステムを開始した。

③ 4年次 (1992)

ホルスタイン種及びアルゼンチンクレオール種牛における DNA多形性に関する研究を行った。

環境感染物質乃至広範に使用されている複合物によりもたらされる遺伝毒性に関する研究を行った。

50頭のホルスタイン種及び 300頭のアルゼンチンクレオール種牛の血液を解析し、ゲノム DNAを分離した。

様々な複合物の遺伝毒性の解析を行った。

4-4-3 感染動物の評価に関する病態生理学及び病態生化学的研究活動

(1) 動物における脂質及び銅代謝

① 3年次 (1991)

[生化学研究室]

ミクロソーム膜からバルミチン酸及びレチノイドを除去することに関するマウス肝サイトゾル蛋白質の影響を検討した。

牛腸粘膜の3つの異なる剥離により得られたサイトゾル蛋白質のバルミチン酸への結合能を検討した。

〔生理学研究室〕

心筋生理学の研究を一般的実験動物を用いて実施し、種差を検討した。

② 4年次(1992)

飽和、未飽和脂肪酸とラット肝ミクロソーム及び脂肪酸結合蛋白質(FABP)との相互作用を検討した。

FABPによるミクロソームから未飽和脂肪酸除去は飽和脂肪酸による除去よりも効率的であった。

4-4-4 フィールド適用を目指した総合的研究活動

(4) 4年次(1992)

CEDIVEの活動目的は、牛トリコモナス症のような感染症の診断技術の向上であった。しかし、JICAから供与される機材の遅れにより実際の研究活動は初期段階であった。

5. プロジェクトの効果

(1) R/Dでのマスタープランは、「家畜における微生物（細菌、ウイルス、真菌、原虫）感染症の診断のための病理学的・免疫学的研究活動」に関する観点（視点）から構成されている。

この計画は、病理学、微生物学、ウイルス学、寄生虫学、遺伝学、生理学、生化学、実験動物学の分野での基礎及び応用の研究活動を通じて行われた。

(2) これらの研究活動と日本でのアルゼンチン人の研修にかかわる成果は、既に発表されている次の資料に述べられている。

- ① プロジェクトの年次報告1-IV
- ② 1992年と1993年度の獣医学部の教官と研究者の第1回及び第2回年次大会の要旨
- ③ 獣医学部、人的資源普及サービス及び研究分野に関する1992年度と1993年度報告
- ④ アルゼンチン国と日本国間の獣医学分野での研究の共同プロジェクトに関する第1回及び第2回会議（セミナー）の要旨
- ⑤ 1991年度と1992年度のFVSについての実状

(3) 本プロジェクトは研究活動に焦点を合わせるものであったが、他の波及効果としてアルゼンチン国のみならず、近隣諸国の学者が参加した学会を獣医学部が開催したこと、フルタイムの研究者が増員されたこと、基本的サービスや施設のための予算が増額したこと等数々の点で、このプロジェクトは大きなインパクトを与えた。

(4) 86件の科学論文の発表や種々の学術会議での153件の口頭発表などを考慮すれば、ラ・プラタ大学の管理運営面に関するプロジェクトの実施効果は、ラ・プラタ大学講座間での研究協力関係の強化やスタッフの研究能力の進展において、多大なものとして評価される。

(5) 外部への波及効果の一例として、研修コース、講義、Workshops、学会などの普及活動が1990年以降、計25回も開催され（参考12）、ブラジル、ウルグァイ、ボリヴィア、チリのようなラテンアメリカ諸国からの研究者も参加している。

(6) 1989年から現在に至るまでに増加したフルタイム研究者は、ラ・プラタ大学での研究活動の強化に多大な寄与をもたらした。

(7) 「家畜の伝染性、毒素原性、代謝原性疾患の診断のための病理学的、免疫学的、生物学的アプローチ」という総合的なタイトで行われた第2回セミナーは、1993年8月12日から14日かけてラ・プラタ大学で開催された。

過去5年間の研究活動の進展状況が、アルゼンチン人C/Pと日本人専門家によってそれ

ぞれ報告された。

このセミナーは参加者のみならず、アルゼンチン国での関連分野の他の研究者の研究能力をさらに向上させる上で多大の効果をもたらしたことであろう。

さらに、それぞれのC/Pは今回のセミナーの準備を通じて、日本人専門家との密接な協力を通じて、研究立案、実施及び研究の取りまとめに関する能力を得た。

(8) 上述の科学的効果以外に、獣医学部は量的、質的に年々進歩した外部サービスを実施している。例えば1990年に比べて、1992年に診断サービスに係る検査件数は66.5%増加し、49%増の利益を得ている。さらに、供与の機材活用や日本で研修したC/Pの活躍によって、広範に及ぶ新たな検査法、手技及びサービス活用が可能となった。

しかし、CEDIVEにおける野外応用を目的とした協同研究活動は未だ初期段階であるため、プロジェクトの外部波及効果は現在のところ限られたものとなっている。

6. プロジェクトの管理運営体制

- (1) プロジェクトは、以下の3ヵ所のサイトで実施されている。
 - ① 国立ラ・プラタ大学獣医学部
 - ② チャスコムス診断研究センター (CEDIVE)
 - ③ サンタ・カタリーナ実験農場
- (2) ラ・プラタ大学獣医学部のうち、微生物学、原虫学、ウィルス学、病理学、遺伝学、生理学、実験動物学及び生化学の8研究室がこのプロジェクトに関与している。本学部はこのプロジェクトの主要サイトとして、プロジェクトのフレームワークとして定義されている研究活動の向上に貢献してきた。
- (3) CEDIVEは、CONICETとCICによって、1976年に創設された機関で、1986年からは、ラ・プラタ大学獣医学部の附属機関となっている。本センターの主要業務は、国内家畜の診断サービス業務である。年間約60人以上の獣医師から約1,000件の診断依頼がある。この診断サービスにより、本センターの維持・管理費等をまかなっている。本センターは獣医師及び農家より得られた研究材料をラ・プラタ大学獣医学部へ提供するという重要な役割を任ている
- (4) サンタ・カタリーナ牧場については、専門家の派遣等直接的な技術移転は行っていないものの、牧場の生産物の販売収入や生産物(研究材料)をプロジェクト(大学)へ提供するという役割を果たしている。
- (5) R/Dでは、国立ラ・プラタ大学長が本プロジェクト実施上の全責任を負うとされている。また、同大学の獣医学部長は、プロジェクト・マネージャーとして、本プロジェクトの運営管理事項に対して責任を負うとされている。
- (6) 獣医学部長の下では、5人のセクレタリー(Secretaries)が配置されており、彼らはプロジェクトの調整役として重要な役割を果たしている。
- (7) ア側のC/Pがプロジェクト開始前に配置されたことは、プロジェクトの円滑な実施に寄与した。
- (8) JICAによって供与された機材は、ラ・プラタ大学獣医学部によって維持され、必要に応じ修理が行われた。アルゼンティン人の機材保守管理者が5ヵ月程雇用されたが、現在のところ機材保守管理者はいない。Dr. Mignel A. Petruccelliは電子顕微鏡の管理責任者である。機械が故障した場合には、民間の修理業者に依頼して適宜修理を行ってきた。獣医学部は大学当局にプロジェクトの機材の管理責任者を配置するよう要請し

ている。

- (9) 電気供給の改善については、獣医学部は93年7月末に獣医学部と農学部共用の自家発電機を設置した。
- (10) 現在のところ、ガス、水及び電気については特別の問題はない。
- (11) ラ・プラタ大学における堅実な研究システムを構築するため、C/P研修の効果的な利用に対し、正当な配慮が払われた。すなわち、研究活動の中核となる研究者及び管理者を養成するため、この研修制度はC/Pを日本の科学・研究上の倫理及び日本の文化に接する機会を与えた。東京大学と他の関連大学・機関は限られた予算の中、可能な限りC/Pを長期間受け入れられるよう、あらゆる努力を行った。
- (12) かつて、巡回指導調査団は、プロジェクトには十分な数のC/Pが配置されているが、本質的な研究活動を遂行する上で必要不可欠なフルタイム研究者の数が不十分であると報告した。この事実は、当時の研究活動が遅延していた一つの要素であると推測される。しかしながら、今回の調査では、プロジェクト開始当時32名であったフルタイム教官数が54名に増員されていた。この点についての大学側の自助努力は高く評価される。
- (13) ア側と日本人専門家チームとのコミュニケーションは、定期会合が毎月開催されていることに鑑み、十分であるとみなされる。
- (14) 合同委員会については、R/D上、少なくとも年1回、更に必要に応じ開催することとされている。この委員会ではR/Dのマスタープランに沿って、T S Iの全体の進展度合及び両国政府によって取られた措置をレビューした。加えて、次年度の活動計画を策定するとともに、必要に応じ両国政府に対し関連事項について勧告を行った。
- (15) 合同委員会は、毎年、J I C A調査団がプロジェクトを訪問した際開催され、研究活動に関する問題点について討議するとともに、R/Dに従って上述の事項について検討した。とりわけ、プロジェクトの進展状況の詳細なレビュー及び策定された次年度の年次計画はプロジェクトの円滑な推進に貢献した。
- (16) 実験動物学研究室については、S P F実験動物の生産・配布活動が軌道に載った場合には、現行のスタッフ配置又はこれら管理システムは不十分となるであろう。

7. 自立発展の見通し

7-1 経済的自立発展の見通し

- (1) プロジェクトの開始当初は、経済的理由によりプロジェクト遂行に必要なアルゼンティン側の資材供与が困難な状態が続いていた。このような状況から、日本政府により1990年9月5日に電子顕微鏡が設置された。
- (2) 現在に至る間、慢性的な財政難が続いているにもかかわらず、アルゼンティン側は、研究遂行に必要な資材供与及び電力と水の供給改善に対し、可能な限りの努力を行った。
- (3) 事実、アルゼンティン側はプロジェクトのローカルコスト総額の約40%を負担している。
- (4) 研究費の獲得状況は研究室ごとに異なっている。現時点では遺伝学、ウィルス学、生化学及び病理学の各研究室が学外から研究資金を得ている。しかしながらプロジェクト終了後の研究活動を円滑に遂行するためには、アルゼンティン側の研究者は自らの研究資金獲得に向けて、より一層努力を重ねる必要がある。
- (5) 計17名のカウンターパートがCONICET及びCICより人件費補填を受けている。
- (6) 微生物学及び生化学を除くほとんどの研究室が、診断サービスを通じて外部からの収入を得ている。
- (7) 最近、SPFマウス200匹とSPFラット10匹がウルグアイに出荷された。実験動物学研究室は、その経済的基盤(状態)を改善するため、潜在的な顧客を発掘し、これらと安定した供給関係を確立することが期待される。
- (8) 近い将来における学部の予算獲得の見通しは、なお不明瞭である。現在、獣医学部はCONICETやCICをはじめとする機関から必要な研究資金を得るための努力を続けている。例えば、これら委員会に人員を派遣して、相互の情報交換の効率化に努めている。
- (9) しかしながら、研究の着実な進展に不可欠である実験機材や薬品の購入に対するアルゼンティン共和国政府の予算措置については、とりわけ微生物学及び実験動物学研究室において十分とは言えない。
- (10) 変圧装置の設置、感染動物実験室の内装工事や自家発電機の配線工事を完了するためには、さらに資金が必要である。
- (11) これらの現状に鑑み、経済的観点から合同評価調査は、将来の研究活動に対し、なお危惧を抱いており、これらの点に対してアルゼンティン側が最大限の努力を継続することを

推奨する。

7-2 組織的自立発展の見通し

- (1) プロジェクトの組織・運営に関する機構は確立しており、過去5年間にわたって機構改革は行われていない。
- (2) フルタイム研究者数の増加という点から見て、現在のプロジェクト組織は、プロジェクト開始当初に比べて改善されている。プロジェクトの管理・運営組織もよく整備されている。
- (3) 1989年度から1992年度にかけて、政府方針に従って人員削減が行われた結果、獣医学部では、1983年度と比較して約50名の欠員が生じている状況にある。しかし、最近この政策が終了し、現在空席となっている定員の補充が可能となった。
- (4) 上述の如く、実験動物の生産・供給体制は不十分である。

7-3 技術的自立発展の見通し

- (1) 日本で研修を受けたカウンターパートは、日本から帰国後、全員がフルタイム・スタッフに昇格し、ラ・プラタ大学における研究基盤の発展のみならず、日本人専門家の適切な助言のもと、関連研究分野へ適用が可能な実地的技術の改善に対しても貢献している。
- (2) これに加えて、学術論文の掲載数や口頭発表の回数を考慮に入れると、獣医学部における研究活動は全般として着実に活性化され発展しつつある。
- (3) ア側は、研究スタッフがそれぞれの研究分野における国際的評価を得られるような体制を早急に確立すべきである。このことにより、国内外からの研究資金を獲得する機会が拡大する。そのためには研究能力に秀れたスタッフの研究活動をより一層推進すべく、学部として支援することが肝要と思われる。

8. フォローアップの必要性

8-1 協力期間延長の要否

上述のように、総合的に判断すると、本プロジェクトは現在概ね順調に進捗し、各研究室の研究活動の活性化には著しいものがある。しかし、上述のように、SPF動物の繁殖・利用、CEDIVEにおける供与機材を利用した活動、及びローカルコスト捻出が十分とは言えない。

従って、実験動物学研究室及びCEDIVEを中心に、2年間のフォローアップを行い、技術指導を継続することが適当であると考ええる。

8-2 フォローアップの内容と方法

以下の協力課題について、更に2年間のフォローアップ協力が必要である。

- (1) CEDIVE周辺の家畜疾病の診断
- (2) 診断結果に基づいた家畜疾病の予防と治療
- (3) SPF動物の遺伝学的、微生物学的モニタリングシステムの確立
- (4) SPF動物の大規模コロニーの確立

更に、プロジェクトの研究協力の基本的サイトとしては、CEDIVEと獣医学部の実験動物学研究室が適当である。

フォローアップの方法は、以下のとおり。

(1) 日本人専門家の派遣

すでに述べた様に、フォローアップの実質的なサイトは、CEDIVEと実験動物学研究室である。従って、派遣される専門家は、両サイトを中心に応用研究活動を側面から支援できる人材が望まれる。また過去5年間の実績、将来展望を踏まえて、諸事情により研究活動が計画通りに十分に達成されなかった分野に対する一時的な支援も、応用研究活動を発展させる上で望ましいと考えられる。

以上のことから若干名の長期及び短期専門家の派遣が適切と思われる。

(2) C/Pの受入れ

C/P研修の充実度とプロジェクトの進捗状況は密接に関係する。上記2サイトや5年間のプロジェクトでさらに補強の必要な分野からの研修員の受入れが本プロジェクトの一層強化に繋がるものと考えられる。同時に研修員の質と将来性及び受入れ側の事情も考慮すると、毎年2～3名の研修員の受入れが適当であると考ええる。

(3) 機材供与

診断技術の発展や実験動物の生産拡大に伴い派生すると考えられる機材の必要性は容易に推察されるので、予算の枠内で、現地からの要請を十分に踏まえて対処すべきであると思料する。

9. 評価結果総括

9-1 評価の総括

合同評価調査団は、過去5年間の協力活動について評価した結果、以下のような結論に達することに合意した。

- (1) 日本側、R/D及び TSIに従って、専門家の派遣、研修員の受入れ、機材供与、ローカルコストの負担等を通じ、プロジェクトの実施に努力した。
- (2) アルゼンティン側は、ラ・プラタ大学が財政難に直面しているにもかかわらず、スタッフ配置、中央実験棟「Pabellon Nocard」の改修、他の関連施設の改修、電気・水道の供給問題の改善等について可能な努力を行った。
- (3) 評価の方法論に関し、研究課題が複数の研究室に関係していること、研究課題の実施期間が研究室によって異なること等の理由により、合同評価調査団は各研究室における研究活動を正確に評価することは困難であると考えた。
- (4) しかしながら、外部からの研究費獲得額及び人件費補填額、フルタイム教官数、科学論文・口頭発表数や卒業研修コースの開催及び外部サービス（診断サービス）等種々の要因に基づいて評価を行った。これら要因は、研究活動及び研究者の養成度合いを評価する上の指標と考えた。
- (5) これら指標に基づき過去5年間の評価を行った結果、ウイルス学及び病理学の各研究室の研究活動は高く評価され、遺伝学、生化学及び原虫病学研究室でも満足すべき成果が得られた。生理学及び微生物学研究室では一応の目的が達成された。
- (6) しかしながら、実験動物学研究室においては、アルゼンティン国のハイパー・インフレーションの影響で、JICAによる実験動物舎の建設が大幅に遅延したことにより、当該研究室の研究活動の進展は十分とは言えない。
- (7) また、プロジェクト4年目の92年度から開始されたCEDIVEにおける研究活動についても、当該年度の供与予定の機材の供与が遅れたため、本格的な研究活動は最終年度である93年度に開始されるものと期待される。
- (8) 研究活動に関する評価結果を要約すれば以下のとおり。
 - ① ウイルス学：診断技術の研修により、主要な家畜疾病の診断に使われる全方法の標準化が可能になった。その結果、研究室の自活が可能となった。
 - ② 病理学：剖検、組織病理及び細胞学のレベルは新しい機器と方法により有意に改善された。

- ③ 遺 伝 学：近代的遺伝学の技術の開発により、家畜繁殖と同定に関する遺伝学的研究の遂行が可能となった。
- ④ 生化学及び生理学：生化学研究室では、生体膜より脂肪酸結合蛋白が単離・精製され、他の細胞質蛋白質との関連について検討が行われた。生理学研究室では、銅測定用の酵素学的測定法が改良され、銅欠乏症の低価格のマッピング・プロジェクトが開始された。
- ⑤ 原 虫 学：トキソプラズマに対する高度免疫血清と異なる動物種の IgG及び IgEを得た。ペルオキシダーゼで標識したコンジュゲイトを作成した。バベシアとトキソプラズマ・コンジィの抗原に関して、SDS-PAGEと免疫ブロット法で研究した。
- ⑥ 微 生 物 学：新しい技術によりマイコプラズマ、ヘモフィルスおよびカンピロバクター等の細菌に関する進んだ研究が可能となった。
- ⑦ 実験動物学：Balb/cJ と C57BL/6Jマウス及びFisher344/N, WKAH/Hokと ACI/N ラットの生産を開始した。細菌学的モニタリングの新技术を確立した。

総体的に、獣医学部の研究レベルは向上した。研究活動の成果は、大学院や卒後の研修コースに活用されている。

9-2 取るべき措置

ア側のフォローアップ期間中に取るべき措置は、9-4の提言のとおり。

日本側の取るべき措置としては、専門家、特に実験動物分野の長期専門家のリクルートを前広に進めることが肝要である。

9-3 教 訓

本プロジェクトが成功裡に終了しようとしている現在、最大の教訓は、実質的に日本側がイニシャチブを取って協力を進めつつも、相手側との十分な協議の下でプロジェクトを実施したことである。

以下、段階的にいくつかの教訓を述べる。

<良かった点>

- ① プロジェクトの調査段階において、相手側の意図と目的、目標を冷静に判断し、当時の機材の配置状況、ア側の人的資源の量と質、従来の研究活動と意欲、人材養成の将来的展望を適切に調査し、ア側の不十分な面をとらえたこと。

- ② 研究テーマは、ア側のプロポーザルを踏まえて決定するシステムを採用したこと。
- ③ 人材養成を図るため、C/P研修に十分配慮するとともに、帰国後のC/Pの処遇についても、ア側に申し入れたこと。
- ④ 国内委員会の Working Groupとしての機能を有するラ・プラタ小委員会を東京大学内に設置し、プロジェクトに係る運営計画（機材、C/P研修等）案を作成の上、国内委員会で活発な討論を行ったこと（参考13）
- ⑤ 毎年の合同委員会において、一定のフォーマットに従って昨年度の活動をレビューし、次年度の活動計画を策定したこと。
- ⑥ 研究活動を推進する上で、最も行動力のある30代から40代前半の日本人専門家を中心に派遣出来たこと。
- ⑦ C/P研修員をお客として扱わず日本的な教育・指導を行い、日本人の組織的な思考を教えたこと。
- ⑧ ア側の対応が非常に誠心誠意であったこと。

<悪かった点>

- ① 不測のハイパーインフレーションにより、実験動物舎の建設が遅延したこと。
- ② 大学院及びC/Pの候補者がア側の都合により数人キャンセルされたこと。
- ③ 機材の供与が円滑に行われなかったこと。

9-4 提言

合同評価調査団は、本プロジェクトのR/Dで規定されている5年間の協力期間終了後、以下の協力課題について、更に2年間のフォローアップ協力が必要であることを勧告することに合意した。

- (1) CEDIVE周辺の家畜疾病の診断
- (2) 診断結果に基づいた家畜疾病の予防と治療
- (3) SPF動物の遺伝学的、微生物学的モニタリングシステムの確立
- (4) SPF動物の大規模コロニーの確立

更に、プロジェクトの研究協力の基本的サイトとしては、CEDIVEと獣医学部の実験動物学研究室を提案する。

感染症や微量要素欠乏症の診断のために、過去5年間で確立された種々の技術の活用は、アルゼンティン国での牧畜産業に対する一層の貢献と発展の可能性を秘めている。これら診断技術を応用するために、フォローアップ協力期間中に基本的なプロジェクトサイトとし

て、CEDIVEの施設を活用することが適当である。CEDIVE周辺の約500人の獣医師と数千の農家の要望に基づいて、CEDIVEはラ・プラタ大学獣医学部の研究活動を容易にする仲介者として、重要な役割を担うことが期待される。

SPFマウスやラットを国際的水準に見合う価値のある研究成果を上げるために活用すれば、基礎科学の分野において、プロジェクト期間中に実施されたラ・プラタ大学獣医学部での研究活動が更に発展するであろうことは、容易に期待される。前述のごとく、ラテン・アメリカ諸国の中でSPF動物を生産しているのは、当該実験動物学研究室だけである。それゆえ、当該研究室に対し、更なる支援を行うことは、アルゼンティンのみならず、他のラテン・アメリカ諸国の学術団体の発展にも寄与することになる。

しかしながら、合同評価調査団は、このフォローアップ協力が以下の提言をアルゼンティン側が受入れることを条件として、開始されるべきであることを強調したい。

- (1) アルゼンティン政府及びラ・プラタ大学は、このプロジェクトの重要性の認識の下、経済的及び科学的支援に対する一層の努力を継続すべきである。
- (2) フォローアップ協力期間においては、フィールド適用に焦点を当てた研究活動を強化すべきである。この点に関し、チャスコムス診断研究センターにおいて、地域条件に適用し得る研究活動を促進すべきである。この活動によりR/Dのマスタープランで本プロジェクトの目的として規定されている畜産振興への方向付けがより具体化する。
- (3) 本プロジェクト及びラ・プラタ大学は自立発展性の問題について、極めて精力的に取り組むべきである。日本側の投資は、アルゼンティン政府の通常経費の増額を前提条件として行われるべきである。また、日本側の援助が終了した場合を想定して、アルゼンティン側が、現行の研究活動を維持する上で必要な財政水準を推定することは非常に重要なことである。
- (4) ラ・プラタ大学は、プロジェクト運営に係る通常支出及び資本支出実績を調査すると共に、2年間のフォローアップ協力期間の支出計画を立てるべきである。
- (5) ラ・プラタ大学獣医学部は、学部運営の観点から自立発展性を改善するために、教官給与の増額に最大限の努力を傾注すべきである。
- (6) フォローアップ協力終了後を見通して、ラ・プラタ大学は、積極的に研究課題を立案し、かつ利用可能な財政的援助を追求すべきである。
- (7) 詳細かつ実行可能なSPF実験動物の生産・配布システムを可能な限り早急に構築すべきである。この点に関し、実験動物の生産拡大に対処するため、獣医学部長は、内部諮問委員会を設置するための措置を取るべきである。加えて、実験動物の生産・維持に必要な

ケージを購入するため、アルゼンティン側は努力すべきである。

(8) 研究活動に進展のみられる6研究室は、CEDIVEから提案される協同研究活動のテーマに対して緊密に協力するとともに、運営資金を稼ぐため、フィールドに適用し得る総合的研究活動を発展させるべきである。

(9) 微生物学研究室の研究活動を活性化させるため、ラ・プラタ大学獣医学部は若手教官の研究活動を進展させる能力を有する教授を雇用するよう努力すべきである。

(10) フォローアップ協力期間終了後、すべての関連研究活動は、ラ・プラタ大学獣医学部及びアルゼンティン政府によって支援されるべきである。

10. その他

10-1 教育省での打ち合せ結果

- (1) ア国では、大学の自治を尊重する観点から、学内の予算配分は、大学側の判断に委ねている。
- (2) 一般予算のほかに「特別基金」予算があり、ラ・プラタ大学を含む8国立大学が予算の配付対象となっている。
- (3) 大学教官の給与改善を通じ、研究活動の向上を図ることを目的とする新規予算（94年度）を、教育省で準備している。現在、ア国には約10万人の教官がいるが、実際の研究活動を行っている教官は、全体の6%しかいないという現状を背景に考案された予算である。
- (4) 国際的な技術協力を行っている大学（プロジェクト）に対する支援予算（95年度新規予算）を考案中。本プロジェクトは、教育省でも高く評価されていることから、本プロジェクトに対する支援予算として期待される。

（以上は大学長官の発言）

- (5) このように、近い将来、国際協力に対する教育省の支援方針が明確化されるとのことである。

10-2 全体会議の様様

獣医学部長の発言のうち、注目すべき点は以下のとおり。

(1) 管理運営体制

- ・ 人員配置については、計画に沿って、できる限りの努力を行った。
- ・ 89年度から92年度にかけて、政府の人員削減政策により、現在のところ獣医学部で約50名の欠員（対83年度との比較）が生じている。しかしながら、この政策が解除されたため、92年6月以降、教育関係者を中心に欠員の補充が可能となった。
- ・ 日本で研修を受けたすべてのC/Pは、一人も辞めないで、学部における研究水準の向上に貢献している。
- ・ 機材の利用状況は良好。
- ・ 施設の維持管理は大学の予算により行っている。機材管理者の配置について大学当局と交渉中。
- ・ 電気の問題が懸念されるが、実験動物舎には自家発電機を設置して本件問題の改善に

- 努めている。他の研究室に対する電気の供給については、現在のところ問題はない。
- ・ 獣医学部に対する電気の供給については、現在のところ医学部のトランスを通して行われているが、獣医学部と農学部共用のトランスを設置すべく準備を進めている。
 - ・ ガス、水、電気については問題ない。
 - ・ 病理解剖室の2階を93年末から94年初めにかけて増設の予定。

(2) プロジェクトの効果

- ・ (各講座の研究経験に差があることから、プロジェクトの効果を計ることは容易ではないが) 日本で研修を受けたC/Pにより各講座における研究活動が活発になったことが最大の効果ではないかと考える。特に、ウィルスと病理研究室の研究活動には目覚ましい進展があった。
- ・ 外部への波及効果については、診断サービスによる収入が伸びており、今後も診断サービス活動を通じて、外部との連携強化を図って行きたい。
- ・ 外部収入の80%は各研究室に還元され、残りの20%が大学の収入となる(ただし、CEDIVEは例外)。
- ・ 89年度から、病理、ウィルス、実験動物及び原虫学の研究室では、南米の研究者を対象とした講習会を開催している。
- ・ 本年9月2-3日には、モンテビデオで学部長会議が開催されることとなっている(チリ、ウルグアイ、ボリビア、ブラジルが参加)。

(3) 自立発展性

- ・ 一番問題なのが資金繰りの問題である。
- ・ 学部としては、CONICETとCICに3名、2名の職員をそれぞれ派遣して、研究費の確保に努めている。

(4) 予算確保の見通し

- ・ ア国には27の国立大学があり、大学の予算を増やすのは困難な状況にあるが、大学全体の予算状況はずいぶん良くなっている。
- ・ ラ・プラタ大学の14学部のうち、獣医学部の予算獲得額は、医学部、理学部、工学部に次いで4番目である(フルタイム教官数は3番目)。
- ・ CONICETとCICとの協力体制の強化及び大学予算を獣医学部でできるだけ多く獲得するよう、努力して行きたい。このためには、研究活動をより一層強化する必要がある。
- ・ 2年間のF/Uが決定された場合には、日本で研修を受けたC/Pの処遇改善に努め

て参りたい。

10-3 施設問題

(1) 感染実験動物室の内装工事

壁塗り等の基礎工事は終了しているが、机、エアコン、照明器具等の設置の工事が残っている。2カ月後にはこれら工事も完成するとのことである。

(2) 自家発電機の設置及び配線工事（実験動物学研究室）

7月末に自家発電機の設置は終了。配線工事も、電力会社に依頼済。

(3) トランスの設置

農学部及び獣医学部共用のトランスの設置の重要性は認識している。93年度の予算では対応できないものの、大学の予算担当者が、教育省の政策長官と予算獲得につき、交渉することとしている。

(4) ディープ・フリーザー（微生物学研究室）

4月に機材維持管理調査団が来アした時には、その修理に必要な費用は、400ドルということであったが、その後、ア側で業者に修理を依頼したところ、4,000ドル必要とのことであった。したがって、今のところ、より低価格で修理してくれる業者を捜しているところである。

10-4 合同委員会における大学長の発言要旨

今回のような総合的な評価は初めての経験であるが、評価の意義としては、問題点が明らかにされることと、これによって対策の道が開かれるということである。評価結果には学長として満足している。また、各評価調査員は非常に優秀であると感じた。

JICAの協力には非常に感謝している。とりわけ、このプロジェクト活動によって、研究活動が発展したこと、及び人材養成、研究グループの養成が図られ、得られた技術・知見が生徒に浸透したことの意義は大きい。

2年間のフォローアップ協力を勧告して頂いたことに感謝している。フォローアップ協力終了後は、大学側が独自で支援していく所存である。これ以上外部（JICA）から支援を得ることは適当ではない。2年後の協力終了を目途として、外部からの研究費等獲得を行う必要がある。

大学内部の人材養成はようやく緒についたところであるが、今後は更に生産者団、普及組織、他の研究組織等に対する支援をも強化し、資金獲得に向けて一層の努力を図りたい。こ

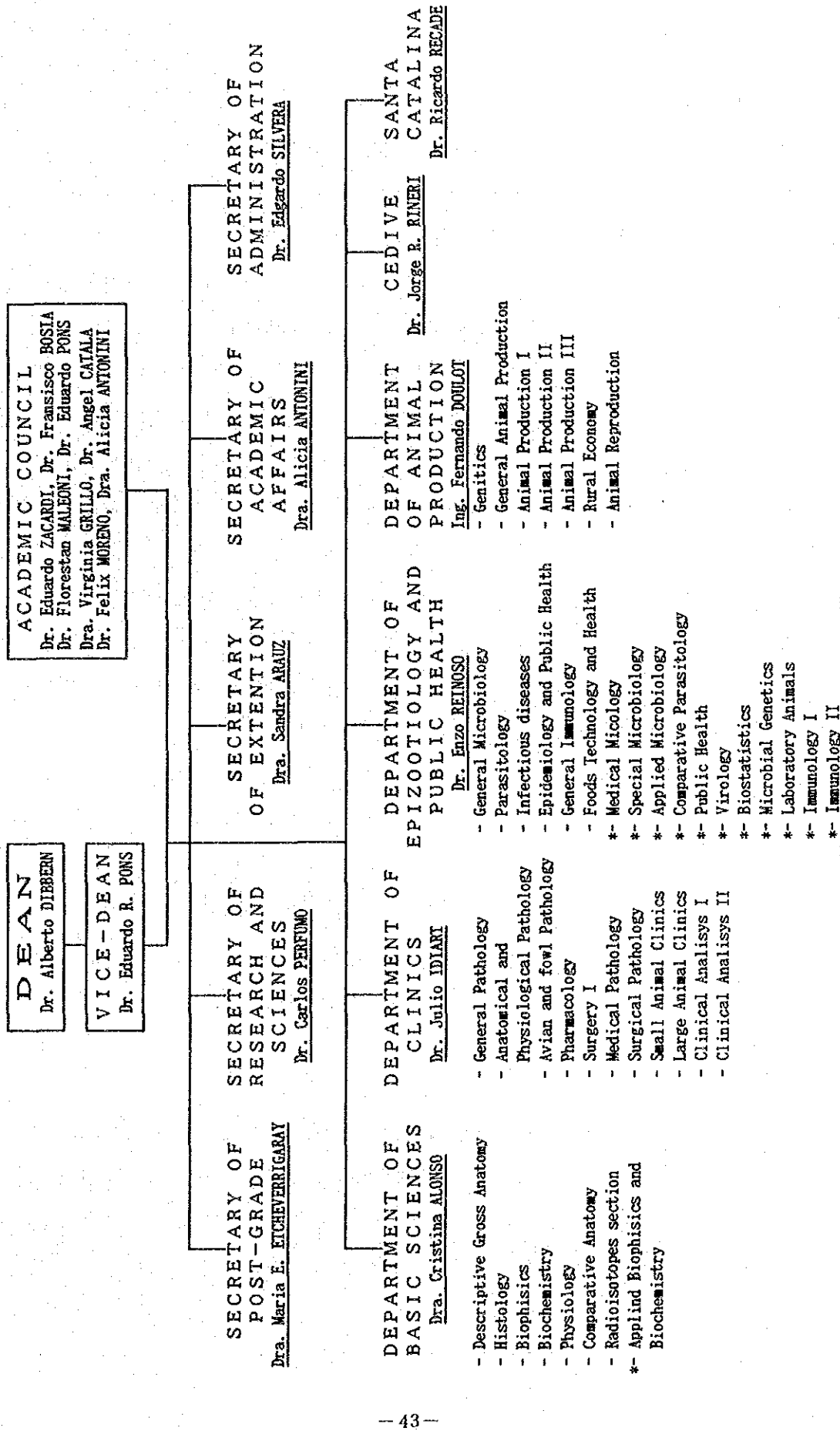
のような外部組織に対する支援を通じて、大学内の研究水準が更に向上するものとする。

評価レポートでは、さまざまな条件（勧告）が提言されているが、これら勧告の内容は大学側の方針と一致している。

付 属 文 書

(参考 1)

Organizational Chart of the Project



* These chairs belong to the postgraduated course of Bacteriologyst.

(参考2)

I. 協力実施プロセス

案件名：アルゼンティン国ラ・プラタ大学獣医学部研究計画

<p>1. 要請の内容と背景</p>	<p>1) 本案件要請に係った機関</p> <p>アルゼンティン国は世界有数の牧畜国であり、輸出額の80%は牛肉、皮革、加工品、小麦、大豆、こりゃん等が牧畜産物が占める。同国は外貨獲得により経済の安定を図るためより一層牧畜を振興し、畜産物の輸出拡大を図っている。しかし、各種の家畜疾病が大きな阻害要因となっている。なかでも口蹄疫による経済的被害は極めて大きい。</p> <p>このため1987年7月、アルゼンティン政府は国立ラ・プラタ大学獣医学部を拠点として家畜衛生を主とする研究強化、及び人材要請を目的としてプロジェクト方式技術協力を我が国に要請してきた。</p> <p>要請の内容は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 重要家畜疾病の疫学調査2) 需要家畜疾病の診断技術の向上3) 需要家畜疾病の予防及び予防技術4) 食品衛生の向上5) 豚の効率的飼養 <p>2) 事前調査実施の経緯</p> <p>要請を受けて国際協力事業団協力事業団は、1988年4月、事前調査団を派遣し、先方側の要請内容、及び実施態勢の確認、研究課題の詳細、実施上の諸問題等について協議を行った。</p>
--------------------	---

<p>2. 協力実施プロセス</p> <p>(1) 要請発出</p> <p>(2) 事前調査</p> <p>(担当/氏名/所属)</p>	<p>1987年7月 日</p> <p>1988年4月1日～1988年4月15日 (15日間)</p> <p>団 長 鈴木直義 帯広畜産大学畜産学部 (総括) 獣医学科教授</p> <p>獣医教育 高橋英司 東京大学農学部 獣医学科教授</p> <p>家畜衛生 米村 弘 農林水産省 動物検疫所検疫部 企画調整課長</p> <p>協力企画 櫛山 博 文部省高等教育局 技術教育課係長</p> <p>業務調整 青木正明 国際協力事業団 農業開発協力部 畜産開発課</p>
<p>(3) 長期調査員</p> <p>(担当/氏名/所属)</p>	<p>1988年8月7日～1988年8月21日 (15日間)</p> <p>獣医学研究 光岡知足 東京大学農学部 獣医学科教授</p> <p>獣医学研究 鈴木直義 帯広畜産大学 畜産学部獣医学科教授</p> <p>獣医学研究 高橋迪雄 東京大学農学部 獣医学科教授</p> <p>技術協力 青木正明 国際協力事業団 農業開発協力部 畜産開発課</p>

<p>(4) 実施協議</p> <p>(担当/氏名/所属)</p>	<p>1988年12月8日～1988年12月20日(13日間)</p> <p>R/D及び暫定実施計画署名 1988年12月15日</p> <p>団 長 高橋迪雄 東京大学農学部 (総括) 獣医学科教授</p> <p>獣医学研究 見上 彪 東京大学農学部 獣医学科教授</p> <p>研究協力 窪田敏志 文部省高等教育局 専門教育課課長補佐</p> <p>企画調整 松尾昌一 国際協力事業団 農業開発協力部 畜産開発課課長代理</p>
<p>(5) 専門家派遣開始</p>	<p>1989年6月16日</p>
<p>(6) 計画打ち合せ</p> <p>(担当/氏名/所属)</p>	<p>1989年12月4日～1989年12月16日(13日間)</p> <p>団 長 見上 彪 東京大学農学部 (総括・獣医学研究) 獣医学科教授</p> <p>研究計画 小川雅也 東京大学農学部事務局</p> <p>業務調整 小林一三 国際協力事業団 農業開発協力部 農業開発課</p>
<p>(7) 巡回指導</p> <p>(担当/氏名/所属)</p>	<p>1990年11月28日～1990年12月10日(13日間)</p> <p>団 長 和田照男 東京大学農学部長 (総括)</p> <p>獣医学研究 後藤直彰 東京大学農学部 獣医学研究学科主任</p> <p>運営管理 富永秀雄 国際協力事業団特別囑託</p>

<p>(8) 巡回指導</p>	<p>1991年10月9日～1991年10月21日（13日間）</p> <p>団 長 （総括） 見上 彪 東京大学農学部教授</p> <p>獣医学 基礎研究 高橋英司 東京大学農学部教授</p> <p>獣医学 応用研究 中澤宗生 農林水産省家畜衛生試験場 九州支場第一研究室長</p> <p>研究協力 森 暉志 東京大学国際交流課</p> <p>業務調整 澤田富雄 国際協力事業団 農業開発協力部 農業開発課</p>
<p>(9) 巡回指導</p>	<p>1992年10月14日～1992年10月26日（13日間）</p> <p>団 長 高橋迪雄 東京大学農学部教授 （総括）</p> <p>獣医学研究 鈴木直義 帯広畜産大学畜産学部教授</p> <p>業務調整 石井智子 国際協力事業団 農業開発協力部 畜産技術協力課</p>
<p>3. 協力実施過程における 特記事項</p>	<p>報告文の本文参照。</p>
<p>4. 他の協力事業との関連性</p>	<p>特になし。</p>

(参考3)

II. インブット総括表

案件名: アルゼンティン国立ブラタ大学獣医学部研究計画

年度	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
協力期間	3/7						2/28
調査団派遣	事前 4/1~4/15 実施 12/8~12/15	計画 12/4~12/16	巡回 11/18~12/10	巡回 10/9~10/21	巡回 10/14~10/26	評価 8/9~8/26	
	リーダー兼微生物学 リーダー兼実験動物学 業務調整 業務調整 実験動物学 原虫病学 原虫病学 微生物学 ウイルス学 ウイルス学	佐藤 平二 笹井 洋 野口俊秀 木部 彰二 笹井 洋 五十嵐都夫 小俣 吉孝 山本 正悟 遠矢 幸伸 桑峰 潤三	4/4 6/2 6/2	4/4 12/14 1/3 6/29 4/1	4/3 6/10 6/10 7/28 9/9 3/31 4/15	6/9 6/9 9/8	3/7 3/7
専門家派遣	実験動物学 実験動物学 実験動物学 実験動物学 原虫病学 原虫病学 原虫病学 病理学 病理学 病理学 病理学 病理学 リーダー	異水 肇 7/21 菅野 茂 3/26 松本 耕三 鈴木 鉄子 鈴木 直義 12/2 斎藤 篤志 12/14 小野 憲一郎 11/28 五十嵐都夫 12/17 林 良博 4/16 土井 邦彦 7/15 立山 晋 9/15 中山 裕之 山口 良二 高橋 英司	8/26 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28 11/28	1/28 3/2	2/22 5/11 6/10 8/29 11/25 12/23	7/28 9/8 2/10 3/21 8/9 9/1	7/5 3/7

II. インプリント総括表 (続き)

案件名: アルゼンティン国立ブラタタ大学獣医学部研究計画

年度	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
協力期間		3/7					2/23
調査団派遣	事前 4/1~4/15 実施 12/8~12/15	計画 12/4~12/16	巡回 11/18~12/10	巡回 10/9~10/21	巡回 10/14~10/26	評価 8/9~8/26	
専門 家 派 遣	病理学 病理学 微生物学 微生物学 微生物学 微生物学 ウイルス学 ウイルス学 ウイルス学 遺伝学/生化学 病理学	柳井 徳彦 塚垣 健一 長谷川 篤彦 伊藤 晋久治 大宅 辰夫 光岡 知足 萬橋 英司 熊登 樹彦 遠矢 幸伸 塩田 邦郎 興組 順二	10/22~11/24	7/17~8/31	8/25~10/24	2/10~3/21 7/19~9/1 8/9~8/16 7/19~9/1	
			5/9~6/2	2/23~4/20	2/22~3/20		

II. インブット総括表 (続き)

案件名: アルゼンティン国立ラプラタ大学獣医学部研究計画

年度	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
協力期間		3/1					2/28
調査団派遣	事前 4/1 - 4/15 実施 12/8 - 12/15	計画 12/4 - 12/16	巡回 11/18 - 12/10	巡回 10/9 - 10/21	巡回 10/14 - 10/26	評価 8/9 - 8/26	
機材供与額(千円)	11,719	71,053	36,576	19,257	28,511	33,000(予定)	
主な機材	生物顕微鏡 蒸留装置 コピー機 Fax 送受信機 車輦	電子顕微鏡 ウルトラマイクログラフ サンブル製作器 高速冷却遠心機 超低温冷凍庫	オートクレーブ 空調用機器 蛍光顕微鏡 バスケットセット	分光光度計 ガスクロマトグラフ ウルトラフリーザー CO ₂ インキュベーター DNA サークルサイクラー	高速冷却遠心機 冷却遠心機 蛍光顕微鏡 実体顕微鏡 純水製造機 マウス・ラットケージ	マウス・ラットケージ 動物飼育アイソレーター 炭酸ガス培養器 DNA ラベリング・検知器 ハイブリダイゼーション ホープン	
研修員受け入れ	実験動物学 Dr. Miguel Angel AYALA 実験動物学 Dr. Daniel Horacio MORALEJO 原虫学 Dra. Cecilia L. Di LORENZO 原虫学 Dra. Cecilia Maria VENTURINI 病理学 Dr. Jose Ignacio AGUIRRE 病理学 Dra. Maria Alejandra QUIROGA 病理学 Dr. Alberto Domingo ARMOCIDA 病理学 Dr. Roberto E. SANGUINETTI 病理学 Dra. Susana Beatriz JURADO 微生物学 Dr. Julio Alberto COPES 微生物学 Dr. Raul Oscar CERDA 微生物学 Dra. Marisa Andrea AMOR 微生物学 Dra. Gabriela Isabel GIACOBINI ウイルス学 Dr. Edgardo Omar NOSETTO ウイルス学 Dr. Armando M. DAMIANI 遺伝学 Dr. Guillermo GIOVAMBATTISTA 遺伝学 Dra. Maria Pia HERAS 病理学 Dr. Carlos Eduardo RAMIREZ 生化学 Dr. Alejandro PALACIOS ミネラル学 Dr. Gabriel TRAVERIA	3/25 - 3/22 1/13 - 12/20 3/5 - 3/4 5/9 - 7/29 6/1 - 5/8 6/1 - 5/26	5/8 - 5/7 3/8 - 3/18	8/26 - 8/19 1/26 - 12/10	6/1 - 5/26 7/19 - 5/26 6/1 - 8/19 7/19 - 5/26	6/14 - 6/13	4/12 - 4/12

II. インブット総括表 (続き)

案件名: アルゼンティン国ラプラタ大学獣医学部研究計画

年 度	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
協力期間		3/1					2/28
調査団派遣	準備 4/1 ~ 4/15 実施 12/8 ~ 12/15	計画 12/4 ~ 12/16	巡回 11/18 ~ 12/10	巡回 10/9 ~ 10/21	巡回 10/14 ~ 10/26	評価 8/9 ~ 8/26	
研 修 員 受 け 入 れ	<p>文部省国際留学</p> <p>ウイルス学 Dr. Marcelo Ricardo PECORARO 解剖学 Dr. Gustavo SUCCOLLI 免疫学 Dr. Eduardo Carlos MORTOLA</p> <p>研修教授</p> <p>ウイルス学 Dra. Maria Elisa ETCHEVERRIGARAY 遺伝学 Dra. Alicia Graciela Antonini 実験動物学 Dra. Cecilia CARBONE 獣医学部長 Dr. Alberto Ricardo DIBBERN 学長 Ing. Luis Julian LIMA</p>					4/15 ~ 6/11 4/15 ~ 6/11 4/15 ~ 6/11	

(参考4)

派遣専門家移転技術一覧

派遣先研究室	専門家名	派遣期間	技術移転
リーダー	佐藤 平二	90.04.04~92.04.03	
	筏井 洋	92.06.10~93.06.09	
	高橋 英司	93.07.05~94.03.07	
業務調整	野口 優秀雄	89.06.02~92.01.03	
	木部 彰二	91.12.14~94.03.07	
実験動物学	菅野 茂	91.01.28~91.03.02	実験動物の心電図学
	松本 耕三	92.02.22~92.05.11	実験動物の遺伝的モニタリング
		93.07.28~93.09.08	実験動物の遺伝的モニタリング及び繁殖計画
	鈴木 映子	92.06.10~92.08.29	実験動物の微生物学的モニタリング
	筏井 洋	92.06.10~93.06.09	実験動物の繁殖及び遺伝的モニタリング
原虫病学	五十嵐 郁夫	89.06.02~92.01.03	トキソプラズマ原虫の分離、同定
		93.08.09~93.09.01	
	鈴木 直義	89.12.02~89.12.14	トキソプラズマ原虫の分離、株保存
		90.11.28~90.12.17	同上
	斉藤 篤志	91.11.25~91.12.23	バベシア原虫の検出法
	小俣 吉孝	91.06.29~92.07.28	トキソプラズマ及びバベシア原虫の診断用抗原作成
	小野 憲一郎	93.02.10~93.03.21	標識抗血清の作製及び精製技術
病理学	林 良博	89.06.16~89.07.15	電子顕微鏡標本作成技術
	土井 邦雄	89.07.21~89.09.15	免疫組織化学技術
	板垣 慎一	89.09.01~90.12.13	レクチン組織化学及び電子顕微鏡の操作法
		93.07.19~93.09.01	免疫組織化学及び電子顕微鏡の操作方法
	興紹 順二	90.05.09~90.06.02	電子顕微鏡の据え付け
	立山 晋	90.11.18~90.12.19	病理組織学的診断技術
	中山 裕之	91.04.20~91.06.29	免疫組織化学的診断技術
	山口 良二	92.07.31~92.08.27	電子顕微鏡操作方法及び実験動物の感染症の病理学
	柳井 徳磨	93.02.10~93.03.21	狂犬病及び腫瘍の診断
微生物学	輿水 馨	89.07.21~89.08.26	マイコプラズマの分離培養法
	佐藤 平二	90.04.04~92.04.03	サルモネラ菌の分離、同定
	長谷川 篤彦	90.10.22~90.11.24	真菌症の診断
	伊藤 喜久治	91.07.17~91.08.31	カンピロバクターの分離、同定
	大宅 辰夫	92.08.25~92.10.24	カンピロバクターの分離、同定
	山本 正悟	92.09.09~93.09.08	最近感染症の診断
	光岡 知足	93.08.09~93.08.16	動物モデルを用いたバイオメディカル研究

ウイルス学	高橋 英司	89.06.16~89.09.15	ウイルスの抗原解析法
	熊埜御堂 毅	91.02.23~91.04.20	馬伝染性貧血の維持感染系の作出
	遠矢 幸伸	91.04.01~92.03.31	モノクローナル抗体作成技術
		93.07.19~93.09.01	ウイルス感染症の診断
	乗峰 潤三	92.04.15~94.03.07	ヘルペスウイルスの分子疫学
遺伝学	塩田 邦郎	92.02.22~92.03.20	DNA解析技術
生理学			
生化学	塩田 邦郎	92.02.22~92.03.20	脂質結合蛋白の解析
チャスコムス 診断センター			

(参考5)

プロジェクト名: アルゼンティン ラブラタク大学獣医学部研究協力計画

＜供与・携行機材の利用・管理状況表＞

供与年月	番号	機材名 (メーカー名・型式)	価格(万円)	数量	利用(保管)場所	利用状況	管理状態	備考(特記事項)
1989.04	1	ワゴン車 (ルノー・TRAFIC TA-52)	269	1	ラブラタク大学獣医学部	A	A	昭和63年度機材供与費 現地購入分
1989.04	2	生物顕微鏡 (ニコン・OPTIPHOT XB-11)	179	1	原虫	A	A	"
1989.04	3	コピーマシン (リコー・FT-4480)	46	1	フロジエクト・オフィス	A	A	"
1989.04	4	FAX送受信機 (リコー・FAX-10)	45	1	フロジエクト・オフィス	A	A	"
1989.04	5	PHメーター (ALTRONIX・I-A-IPX)	11	1	原虫	A	A	"
1989.04	6	蒸留装置 (BARNSTEAD・EMSE-5)	78	1	原虫	A	A	"
1989.04	8	ケージ、柵、餌用ビン	44	1	原虫	A	A	"
1989.06	9	試薬、マイクロピペット等	25	1	原虫	A	A	"
1989.06	10	試薬、実験器具	55	1	ウィルス、病理	A	A	"
1989.07	12	ワープロ (キヤノワーDc335)	30	1	フロジエクト・オフィス	A	A	"
1989.12	19	試薬、血清等	52	1	原虫、病理	A	A	"
1989.12	20	試薬、血清等	24	1	原虫、病理	A	A	"
1990.05	22	電子顕微鏡 (日本電子・JEM-1200EX II)	3,230	1	電顕室	A	A	"
1990.05	23	冷却水循環器 (SH-RAC10A)	320	1	電顕室	A	A	"
1990.05	24	自動電圧安定器 (SVC-2240)	58	1	電顕室	A	A	"
1990.05	25	真空蒸気乾燥機 (JEE-4X)	213	1	電顕室	A	A	"
1990.05	26	工具セット (SM-TOOL2)	8	1	電顕室	A	A	"
1990.05	27	ウルトラ・マイクローーム (SUPERNOVA)	680	1	電顕室	A	A	"
1990.05	28	ナイフ・メーカー	418	1	電顕室	A	A	"
1990.05	29	オートフル製作器、暗室機器	51	1	電顕室	A	A	"
1990.06	30	オートクレープ (ひらやま、RA-30)	55	1	微生物	A	A	"
1990.06	31	自動乾燥装置 (ひらやま、DA-80)	52	1	微生物	A	A	"
1990.06	32	インキベクター (ひらやま、F-100D)	32	1	微生物	A	A	"
1990.06	33	インキベクター (R.K.I., 10-0455)	32	1	微生物	A	A	"
1990.06	34	顕微鏡 (ニコン、XZF-21)	80	1	微生物	A	A	"
1990.06	35	顕微鏡写真撮影装置 (ニコン、JFX-11A-35WA)	134	1	微生物	A	A	"
1990.06	36	三眼鏡 (ニコン、XB-11用)	10	1	微生物	A	A	"
1990.06	38	嫌気培養装置 (ひらやま、FA-12)	136	1	微生物	A	A	"
1990.06	39	嫌気ジャー (ひらやま、J-45)	163	3	微生物	A	A	"
1990.06	40	ガスバック (B.B.L., 60626)	23	5	微生物	A	A	"
1990.06	41	小型冷却心機 (くぼた、SIT70)	68	1	微生物	A	A	"
1990.06	42	微量冷却心機 (くぼた、KR-1500)	146	1	微生物	A	A	"
1990.06	43	高濃冷却心機 (くぼた、5800)	218	1	微生物	A	A	"
1990.06	44	超音波粉砕器 (BRANSON, 250type)	76	1	微生物	A	A	"
1990.06	45	凍結装置 (ADVANTIC, KSP-142TF)	62	1	微生物	A	A	"
1990.06	46	製氷器 (ほしざき、F-120B)	48	1	微生物	A	A	"
1990.06	47	プラスチック機器	59	1	微生物	A	A	"

利用状況区分: A=頻繁に使用(日常的に使用)、B=良く使用(週に1~3回)、C=特定の時期に集中的に使用(理由は、備考欄又は処分理由等欄)、D=現在のところ余り使用されていない(年に3~11回)、理由は、備考欄又は処分理由等欄)、E=特別な理由により使用されていない(理由は、備考欄又は処分理由等欄)

管理状況区分: A=点検・整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している、B=使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好、C=整備を行なえば使用可能な状態にある、D=使用は困難な状態である

＜供与・携行機材の利用・管理状況表＞

供与年月	番号	機材名 (メーカー名・型式)	価格 (万円)	数量	利用 (保管) 場所	利用状況	管理状態	備考 (特記事項)
1990. 09		恒温槽 (東京理科, NT-220H)	37	3	微生物-2・原虫-1			平成元年度機材供与費 本邦購送分
1990. 09		低温恒温器 (サンヨー, MIR-152)	68	2	微生物			"
1990. 09		フランシス (イース, FR-15BS)	35	1	微生物			"
1990. 09		安定電源 (アドバンテック, BPS-116)	14	1	微生物			"
1990. 09		自動薬留水製造装置 (アドバンテック, GS-200)	52	1	微生物			"
1990. 09		真空ポンプ (ミリボア, XX-5522050)	14	1	微生物			"
1990. 09		逆浸透膜 (東西通商, IRO-1)	27	1	微生物			"
1990. 09		クリーベンベンチ (NUAIRE, NO-201-430E)	60	1	微生物			平成元年度機材供与費 現地購入分
1990. 09		超低温冷凍庫 (KELVINATOR, UC1849CR)	137	2	微生物, 他		A	"
1990. 09		冷凍庫 (KELVINATOR, UC-747)	53	1	微生物, 他		A	"
1990. 09		冷蔵庫 (KELVINATOR)	10	1	微生物, 他		A	"
1990. 09		ワット・カタラ (PARMER, 4802-02)	37	4	微生物-1, 病理-1		A	"
1990. 09		電子天秤 (PRECISA, 100A-300M)	68	2	微生物, 他		A	"
1990. 09		ガラス器具	93	2	微生物, 他		A	"
1990. 10		書籍	20	1	病理		A	"
1991. 02		恒温槽 (VICKING)	15	2	遺伝		A	平成2年度機材供与費 現地購入分
1991. 02		クリーベンベンチ (FILTRAR, FFP-3A)	89	1	遺伝		A	"
1991. 03		マイクロ离心机 (EPENDORF, 5415-CF)	37	1	遺伝		A	"
1991. 03		紫外線照射器 (THOMAS SCIENTIFIC, TM-36)	21	1	実験動物		A	"
1991. 03		オートクレーブ (BOGNER, 992-E-VL)	1,012	1	実験動物		A	"
1991. 03		洗浄器 (DAMONTE, AR-1000)	1,100	1	実験動物		A	"
1991. 03		空調用機器	37	1	遺伝		A	"
1991. 05		電流装置	77	1	遺伝		A	"
1991. 07		炭酸ガス培養器 (3164)	47	1	遺伝		A	"
1991. 07		電子バランス (SARTORIUS, A200S)	20	1	遺伝		A	"
1991. 07		PHメーター (METROHM, E-654)	56	1	遺伝		A	"
1991. 08		顕微鏡 (オリンパス, BHT-112-8E2-DA)	30	1	遺伝		A	"
1991. 08		顕微鏡 (オリンパス, CX2-BIP-2)	64	1	原虫		A	"
1991. 08		生物顕微鏡 (ニコン, VSB-21)	51	1	原虫		A	"
1991. 08		小型閉圧蒸気滅菌器 (サクラ, ASV-3022)	18	1	原虫		A	"
1991. 08		免疫電気泳動装置 (アドバンテック, AE-2)	12	1	原虫		A	"
1991. 08		洗剤用安定電源 (アドバンテック, PS-520)	37	1	原虫		A	"
1991. 08		超音波ビベット洗浄器 (村中医薬器, UT-55)	46	1	原虫		A	"
1991. 08		フラクシオンコネクター (FMV777, SF-160)	111	1	病理		A	"
1991. 08		自動固定包埋装置 (サクラ, RE-12DM-II)	39	1	病理		A	"
1991. 08		DSK包埋恒温器 (星坂イ-IA, TD-500B)						"

利用状況区分: A=頻繁に使用 (日常的に使用), B=良く使用 (週に1~3回), C=特定の時期に集中的に使用 (理由は、備考欄又は処分理由等欄), D=現在のところ余り使用されていない (年に3~11回, 理由は、備考欄又は処分理由等欄), E=特別な理由により使用されていない (理由は、備考欄又は処分理由等欄)

管理状況区分: A=点検・整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している, B=使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好, C=整備を行なえば使用可能な状態にある, D=使用は困難な状態である

＜ 供与・携行機材の利用・管理状況表 ＞

供与年月	番号	機材名 (メーカー名・型式)	価格 (万円)	数量	利用 (保管) 場所	利用状況	管理状態	備考 (特記事項)
1991. 08		オートクレーブ (トミー、SS-320)	53	1	病理			平成2年度供与機材費
1991. 08		超音波ビベット洗浄器 (シバタ、PU-100)	27	1	病理			"
1991. 08		セミクロ電子天秤 (M&D、ER-182A)	39	1	病理			"
1991. 08		生物顕微鏡 (カントン光学、EHL)	12	1	病理			"
1991. 08		PHメーター (総場製作所、F-11)	18	1	病理			"
1991. 08		回転翼型ドライ真空ポンプ (小林理化、DR-25)	11	1	病理			"
1991. 08		テータープレート (井内、PCM-720)	11	1	病理			"
1991. 08		スライドウォーマー (井内、22-158-01)	15	1	病理			"
1991. 08		ラボワート (井内、33-125-01)	18	1	微生物			"
1991. 08		マスターフレックスポン (シバタ、7553-30)	11	1	微生物			"
1991. 08		スライドローター (杉山元、10-1848-SR) 番	30	1	微生物			"
1991. 08		放射光源装置 (オリンパス)	282	1式	微生物			"
1991. 08		全自動撮影顕微鏡 (BHS-313)						
1991. 08		高圧電圧装置 (BHZ-RFL-2)						
1991. 08		全自動撮影装置 (PM10-35ADS-2)						
1991. 08		ポラロイド撮影用アダプター						
1991. 08		泳動用安定電源 (アドバンテック、PS-3020)	28	1	ウイルス			"
1991. 08		泳動用安定電源 (アドバンテック、PS-2020)	30	1	ウイルス			"
1991. 08		回転培養装置 (RKI、RT-1)	41	1	ウイルス			"
1991. 08		振とう培養恒温水槽 (RKI、10-458)	17	1	ウイルス			"
1991. 08		ステレオフィット補正装置 (ミリポア、XL194700)	23	1	ウイルス			"
1991. 08		バスケットセット (ベックマン、342217)	96	1	ウイルス			"
1991. 08		チューブシャー (ベックマン、342420)	21	1	ウイルス			"
1991. 08		ウォーターバス (アドバンテック、LF-2000)	13	1	ウイルス			"
1991. 08		シンカー (RKI、40-0323)	28	1	ウイルス			"
1991. 08		シンクローウエッシュ (タイターテック、110)	10	1	ウイルス			"
1991. 08		シンカー (アドバンテック、MS-210)	25	1	ウイルス			"
1991. 08		マルチチャンネルピペッター (タイターテック)						
1991. 08		77-710-00 8Ch 5~50μl	11	1	ウイルス			"
1991. 08		77-713-00 8Ch 50~300 μl	14	1	ウイルス			"
1991. 08		マルチヒーター (和科産、KH-36)	17	1	ウイルス			"
1991. 08		紫外線ランプ (UVP、R-526)	14	1	ウイルス			"
1991. 08		精密恒温槽 (大洋科学、EZL-80)	49	1	ウイルス			"
1991. 08		トランスミルミネーター (UVP、TH-40)	30	1	ウイルス			"
1991. 08		高圧蒸気滅菌器 (平山、HA-30)	51	1	実験動物			"
1991. 08		マイクログリッド冷却心臓 (久保田、KR-1300)	60	1	実験動物			"
1991. 08		インキュベーター (平山、F-1000)	49	1	実験動物			"
1991. 08		顕微鏡 (ニコン、オブチアフォート2)	79	1	実験動物			"

利用状況区分: A=頻りに使用 (日常的に使用)、B=良く使用 (週に1~3回)、C=特定の時期に集中的に使用 (理由は、備考欄又は処分理由等欄)、D=現在のところ余り使用されていない (年に3~11回、理由は、備考欄又は処分理由等欄)、E=特別な理由により使用されていない (理由は、備考欄又は処分理由等欄)

管理状況区分: A=点検・整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している、B=使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好、C=整備を行なえば使用可能な状態にある、D=使用は困難な状態である

＜ 供与・携行機材の利用・管理状況表 ＞

供与年月	番号	機材名 (メーカー名・型式)	価格 (万円)	数量	利用 (保管) 場所	利用状況	管理状態	備考 (特記事項)
1991. 08		万能殺菌ロッカー	29	1	実験動物	A	A	平成2年度供与機材費 本邦購送分
1991. 08		殺菌線消毒ロッカー	40	1	実験動物	A	A	"
1991. 08		ラット・マウス自動天秤	18	2	実験動物	A	A	"
1991. 08		8 Ch シリンジフェイスベンサー (モデル: 8800)	15	1	実験動物	A	A	"
1992. 02		パソコン (SAMSUNG AT-386)	21	1	共通機材	A	A	平成3年度供与機材費 現地購入分
1992. 02		レザープリンター (HEWLETT PACKARD JET II)	25	1	共通機材	A	A	"
1992. 03		空調機器用フィルター類	103	1式	実験動物	A	A	"
1992. 03		UV27 (SAMSUNG AT-286) とフロッピーディスク (EPSON FX-1050)	31	1	病理	A	A	"
1992. 04		オートクレープ用台車 (内部用)	46	1	実験動物	A	A	"
1992. 04		オートクレープ用台車 (外部用)	110	2	実験動物	A	A	"
1992. 04		脱イオン装置 (LOCKWOOD)	41	1	実験動物	A	A	"
1992. 05		マウス飼育用ケージ LT-221	147	9	実験動物	A	A	"
1992. 05		同上用ラック	69	8	実験動物	A	A	"
1992. 05		ラット飼育用ケージ LT-120	130	5	実験動物	A	A	"
1992. 05		同上用ラック	61	8	実験動物	A	A	"
1992. 05		GROSSLAB STATION (LIFSHOW)	105	1式	病理	A	A	"
1992. 05		MICROSCOPE SLIDE CABINET (LIFSHOW)	11	1	病理	A	A	"
1992. 05		マルチチャネルピペット (COLE-PARMER)	11	1	病理	A	A	"
1992. 05		片天秤型電子ばかり (COLE-PARMER)	14	1	病理	A	A	"
1992. 05		デジタールPHメーター (PARASE, VEGA -VI)	11	1	生化学	A	A	"
1992. 07		ガスクロマトグラフ (島津, GC-14APSF)	231	1	生化学	A	A	"
1992. 09		ホモジナイザー (井内, 51-275-01)	50	1式	実験動物	A	A	"
1992. 09		カメラ (ミノルタ, X-700)	9	1	実験動物	A	A	携行機材
1992. 09		分子吸光度計 (902, BC)	260	1式	生化学	A	A	携行機材 平成3年度機材供与費 現地購入分

利用状況区分：A = 頻繁に使用 (日常的に使用)、B = 長く使用 (週に1~3回)、C = 特定の時期に集中的に使用 (理由は、備考欄又は処分理由等欄)、D = 現在のところ余り使用されていない (年に3~11回)、理由は、備考欄又は処分理由等欄)、E = 特別な理由により使用されていない (理由は、備考欄又は処分理由等欄)
管理状況区分：A = 点検・整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している、B = 使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好、C = 整備を行なえば使用可能な状態にある

＜供与・携行機材の利用・管理状況表＞

供与年月	番号	機材名(メーカー名・型式)	価格(万円)	数量	利用(保管)場所	利用状況	管理状況	備考(特記事項)
1992. 10		クリンベンチ(日立, PCV-1303PNS 3)	121	1式	原虫			平成3年度機材供与費
1992. 10		CO2 インキュベーター(十悪科学, BL-160)	182	1式	原虫			"
1992. 10		ミニプロテクトII (BIO-RAD, No.165-2960)	17	1	原虫			"
1992. 10		トランスプロット装置 (A.T.T.O. AE-6675P)	10	1	原虫			"
1992. 10		倒立顕微鏡 (ニコン, TMS-14A)	58	1式	原虫			"
1992. 10		ベリスタポンプ (A.T.T.O. ACF-2110)	10	1	病理			"
1992. 10		顕微鏡 (カートン光学, SPH-30L)	11	1	病理			"
1992. 10		電子天秤 (メトラン, MP-600)	16	1	病理			"
1992. 10		ラビダス・スラブゲル電気泳動装置 (A.T.T.O. AEP-200A)	36	1式	微生物			"
1992. 10		実体顕微鏡 (ニコン, SM-6)	9	1	微生物			"
1992. 10		標とう恒温槽 (タイテック, R-77カール 11 SD)	29	1	微生物			"
1992. 10		冷蔵ショーカー (サンヨー, MFR-210)	25	1	微生物			"
1992. 10		ベリスタポンプ (ヤマト科学, PA-21A)	18	1	微生物			"
1992. 10		マグネティックスターラー (イワキ, PG-320)	6	1	微生物			"
1992. 10		メディカルディープフリーザー (サンヨー, MDFU-536)	43	1	微生物			"
1992. 10		コンバクトCO2 インキュベーター (井内, 11-786-01)	46	1	ウィルス			"
1992. 10		倒立培養顕微鏡 (オリンバス, CX2-BIC-2)	59	1式	ウィルス			"
1992. 10		DNAサークルサイクラー (PACKIN ELMER CETUS) (PACKIN ELMER CETUS, PJ-2000)	163	1式	遺伝			"
1992. 10		ウルトラフリーザー (FORMA, No.8438)	183	1	遺伝			"
1992. 10		双脱生物顕微鏡 (オリンバス, BHT-112)	45	1	遺伝			"
1992. 10		同上用描画装置 (オリンバス, BH2-DA)	11	1	遺伝			"
1992. 10		液体顕微鏡 (LAIN-LIQUIDE GT-35)	33	1	生理			"
1992. 10		純水製造装置 (ホシガキ, D-4633 E-PURE-3)	48	1	生理			"
1992. 10		分光光度計 (日立, U-1100)	87	1式	生理			"
1992. 10		低ポンププロテクター (ホシガキ, D0603)	10	1	生理			"
1992. 10		ウォーターバス (ヤマト, BT-25)	16	1	生理			"
1992. 10		透心器 (国産, H-108N)	23	1	生理			"
1992. 10		真空アップ (ヤマト, PK-41)	8	1	生理			"
1992. 10		PHメーター (堀場, H7SD)	10	1	生理			"

利用状況区分: A=頻繁に使用(日常的に使用), B=良く使用(週に1~3回), C=特定の時期に集中的に使用(理由は、備考欄又は処分理由等欄), D=現在のところ余り使用されていない(年に3~11回、理由は、備考欄又は処分理由等欄), E=特別な理由により使用されていない(理由は、備考欄又は処分理由等欄)

管理状況区分: A=点検:整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している, B=使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好, C=整備を行なえば使用可能な状態にある, D=使用は困難な状態である

＜供与・携行機材の利用・管理状況表＞

供与年月	番号	機材名 (メーカー名・型式)	価格(万円)	数量	利用 (保管) 場所	利用状況	管理状態	備考 (特記事項)
1992. 10		バイオフィリアーザ (日本列オ-RF-310)	190	1式	共通			平成3年度機材供与費
1992. 10		紫外線検出器 (トソン, UV-8011)	63	1	共通			"
1992. 10		レコダ (トソン, LR-4220)	40	1	共通			"
1992. 10		オートクレーブ (平山, HA-300 M-II)	61	1	共通			"
1992. 10		泳動用安定電源 (アドバンテック, PS-3020)	28	1	共通			"
1992. 10		凍結乾燥用バイアル密封式チャンバー (日本ブリーザー, FL-10用)	60	1	共通			"
1992. 10		嫌気性インキュベーター (平山, BY-50)	57	1	共通			"
1992. 10		液体窒素用器 (MVE, XL-47-11-10)	96	1	共通			"
1992. 10		電子天秤 (A&D, FY-3000)	9	1	共通			"
1992. 10		電子天秤 (A&D, FY-300)	9	1	共通			"
1992. 10		マイクロキッカー (タイテック, P型)	8	1	共通			"
1992. 10		ユニバース自動分注装置 (WEATON, No. 374301)	39	1	共通			"
1992. 10		メディカル低温フリーザー (サンヨー, HOFU536)	43	1	共通			"
1992. 10		マグネティックスターラー (タイテック, G-1)	19	1	共通			"
1992. 10		マグネティックスターラー (ヤマト科学, M-41)	10	3	共通			"
1992. 12		ビデオカメラ (PANASONIC M-2000)	17	1	共通			"
1992. 12		パソナルコンピュータ (GROSS SYSTEM 80386)	31	1式	遺伝学			"
		プリンター (EPSON LQ-570)						
		スキヤナー (GENIUS GS-4500)						
1992. 12		パソナルコンピュータ (GROSS SYSTEM 80386)	36	1式	原虫学			
		プリンター (EPSON LASER II)						
		スキヤナー (GENIUS GS-4500)						
1993. 02		パソナルコンピュータ (DYNABOOK V-386/20)	36	1	事務所			柳井短期専門家庭行機材
1993. 02		プリンター (TOSHIBA J-3100)	17	1	事務所			柳井短期専門家庭行機材
1993. 02		蒸留水製造装置 (ROLCO)	35	1	CEDIVE			
1993. 02		脱イオン水製造装置	47	1式	遺伝学			
1993. 02		恒温槽 (LAUDA T +100 °C/目盛 0.1°C)	34	2	遺伝学			
1993. 02		恒温槽 (LAUDA B +100 °C/目盛 0.01 °C)	23	1	遺伝学			
1993. 03		シンチレーションカウンタ (PACKED INST. C1900-TR)	357	1式	生化学			
1993. 03		クリンベンチ (FILTRAR MFV 2A/D3)	60	1	実験動物学			
1993. 04		業務用車両 (いすゞ TROOPER WAGON)	348	1	共通			
		電子レンジ (THOMAS SCIENTIFIC FS-14EUP)	34	1	遺伝学			
		マイクロトームスカーカット (REICHERT-JUNG 2055)	250	1式	生理学			

利用状況区分: A = 頻りに使用 (日常的に使用)、B = 良く使用 (週に1~3回)、C = 特定の時期に集中的に使用 (理由は、備考欄又は処分理由等欄)、D = 現在のところ余り使用されていない (年に3~11回)、理由は、備考欄又は処分理由等欄)、E = 特別な理由により使用されていない (理由は、備考欄又は処分理由等欄)

管理状況区分: A = 点検・整備が十分に行なわれ、常に使用可能な状態で管理している、B = 使用に際しては特段の問題は無く、管理は概ね良好、C = 整備を行なえば使用可能な状態にある、D = 使用は困難な状態である

(参考6) カウンタバーパート等主要関係者リスト

報告年月日: 1993年6月30日

プロジェクト名	アルゼンティン 国立ラ・プラタ大学獣医学部研究協力計画	協力期間	1989年(平成元年) 3月1日 ~ 1994年(平成6年) 2月28日	報告年月日	1993年6月30日			
協力機関	アルゼンティン 国立ラ・プラタ大学獣医学部 (FACULTAD DE CIENCIAS VETERINARIAS, UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA)	協力期間	1989年(平成元年) 3月1日 ~ 1994年(平成6年) 2月28日	報告年月日	1993年6月30日			
住所	CALLE 50, ESQ. 118, LA PLATA, LA REPUBLICA ARGENTINA	協力期間	1989年(平成元年) 3月1日 ~ 1994年(平成6年) 2月28日	報告年月日	1993年6月30日			
番号	カウンタバーパート氏名	職名	配属年月日	専門分野	学位	指導専門家	研修受入分野(期間)	生年月日, 他
(原虫病学)								
1	DRA. LUCILA M. VENTURINI	PROFESORA TITULAR (主任教授)	1970.03.01	原虫病学	1969年UNLP卒業(獣医学) 1974年獣医学取得	五十嵐 晋孝 他		1945.09.22 FULL TIME
2	DRA. MARIA CECILIA VENTURINI	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1981.03.01	免疫学兼 原虫病学	1979年UNLP卒業(獣医学) 1989年獣医学取得	五十嵐 晋孝 他	イクリア(1982.10 ~ 1983.05) JICA集団・家畜衛生(1983.03.03 ~ 06.22) C/P (1990.03.05 ~ 1991.03.04)	1955.09.01 FULL TIME
3	DRA. CECILIA LAURA DI LORENZO	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1983.03.01	原虫病学	1984年UNLP卒業(獣医学) 1984年自然科学DR取得	五十嵐 晋孝 他	C/P (1991.01.13 ~ 12.20)	1957.05.08 FULL TIME
4	DRA. MARIA LAURA VIGNAU	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1981.03.01	原虫病学	1980年UNLP卒業(自然科学) 1984年自然科学DR取得	五十嵐 晋孝 他		1957.08.18 FULL TIME
(ウイルス学)								
5	DRA. MARIA ELISA ETCHEVERRIGARAY	PROFESORA TITULAR (主任教授)	1966.03.01	ウイルス学	1963年UNLP卒業(獣医学) 1963年獣医学取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸	アムステルダム大学(1968.05 ~ 1969.05) JICA集団・家畜衛生(1987.03.24 ~ 04.18) C/P (1993.04.15 ~ 06.11)	1934.09.10 FULL TIME
6	DRA. GRACIELA ARACELI OLIVA	PROFESORA ADJUNTA (助教授)	1972.03.01	ウイルス学	1966年UNLP卒業(獣医学) 1976年獣医学取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸		1943.09.26 FULL TIME
7	DR. EDGARDO OMAR NOSETTO	PROFESOR ADJUNTO (助教授)	1989.06.01	ウイルス学	1979年UNLP卒業(獣医学) 1982年獣医学取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸	C/P (1989.04.10 ~ 1990.03.08) JICA集団・家畜衛生(1982.05.08 ~ 11.05)	1949.09.28 FULL TIME
8	DRA. CELINA BUSCAGLIA	PROFESORA ADJUNTA (助教授)	1979.03.01	ウイルス学	1978年UNLP卒業(獣医学) 1988年UNLPにて獣医学取得 PhD.取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸	カリフォルニア大学Davis(1983 ~ 1984) コーネル大学(1984 ~ 1988)	1955.11.20 FULL TIME
9	DRA. ESTER TERESA GONZAREZ	PROFESORA ADJUNTA (助教授)	1973.06.01	ウイルス学	1968年ブエノスアイレス大学 卒業(理学院生物学) 1976年UNLPにて獣医学取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸	リヨン, 仏 (WHO による, 1978) JICA集団・家畜衛生(1986.05.26 ~ 11.20)	1945.01.03 PART TIME
10	DRA. MARIA GABRIELA ECHEVERRIA	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1985.03.01	ウイルス学 一般病理学	1986年UNLP卒業(獣医学)	高橋 英司, 逸夫 孝伸	JICA集団・家畜衛生(1988.05.22 ~ 11.15)	1984.03.20 FULL TIME
11	DRA. CECILIA MONICA GALOSI	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1979.03.01	ウイルス学	1978年UNLP卒業(獣医学) 1988年獣医学取得	高橋 英司, 逸夫 孝伸		1956.10.24 FULL TIME
12	DRA. VIVIANA CID DE LA PAZ	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1985.03.01	ウイルス学	1982年UNLP卒業(獣医学)	高橋 英司, 逸夫 孝伸		1959.06.24 PART TIME
13	DR. MARCELO RICARDO PECORARO	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.03.01	ウイルス学	1984年UNLP卒業(獣医学)	高橋 英司, 逸夫 孝伸	JICA集団・家畜衛生(1988.05.23 ~ 11.17) 日本在留中(文部省派遣留学)	1957.09.03 FULL TIME

(注1) 職名のカタゴリ一の順は次のとおり: 1) PROFESOR TITULAR (主任教授), 2) PROFESOR ADJUNTO (助教授), 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任=講師クラス).

(注2) UNLP=UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA (国立ラプラタ大学), CEDIVE=CENTRO DE DIAGNOSTICO VETERINARIO (チャコスムス診断センター), C/P=本件計画カウンタバーパート, CONICET = CONSEJO NACIONAL DE INVESTIGACIONES CIENTIFICAS Y TECNICAS (国立科学技術研究評議会)

番号	カウンタートバー氏名	職名	配属年月日	専門分野	学歴	指導専門家	研修受入分野(期間)	生年月日,他
14	DR. ARMANDO DAMIANI	CONICET 奨学生	1992.05.01	ウィルス学	1992年UNLP卒業(獣医学)	乗崎雅三	C/P (1993.07.19~1994.04.12) 渡航予定	1967.04.27 FULL TIME
(一) 舟及び内科学)								
15	DR. EDUARDO JUAN GIMENO	PROFESOR ADJUNTO (助教)	1989.11.01	一般病理学	1977年UNLP獣医学DR取得 1983年スウェーデンUPPSALA 大学修士号取得	板垣慎一, 他	スイス, 西独(DSCE) 1977.2~1978.2, ヌーヴ UPPSALA 大学(SIDAL) 1982.3~1983.5及び 理理CONICETに, 1988.11~1989.5)	1948.12.17 FULL TIME
16	DR. ENRIQUE LEO PORTIANSKY	PROFESOR ADJUNTO (助教)	1985.03.01	一般病理学	1982年UNLP卒業(獣医学) 1987年獣医学DR取得 1984年イェールWEIZMANN INSTITUTE 修士号取得	板垣慎一, 他	イェール WEIZMANN INSTITUTE OF SCIENCE (1982~1984)	1958.10.02 FULL TIME
17	DR. JOSE IGNACIO AGUIRRE	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.07.01	一般病理学	1989年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	C/P (1991.07.29~1992.07.22)	1966.01.19 FULL TIME
18	DR. ANDREA CARRERAS	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1990.05.01	一般病理学	1987年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他		1964.11.08 FULL TIME
(角音U・病理生理学)								
19	DR. CRALOS JUAN PEREYMO	PROFESOR ADJUNTO (助教)	1967.03.01	解剖・病理 生理学	1969年UNLP卒業(獣医学) 1980年獣医学DR取得	板垣慎一, 他	ポネフ王立大学(1974), ヌーヴ(1979), JICA奨励・家畜衛生(1985.07.18~08.17)	1946.02.03 FULL TIME
20	DR. JULIO ROBERTO IDIART	PROFESOR TITULAR (主任教授)	1965.03.01	解剖・病理 生理学	1968年UNLP卒業(獣医学) 1980年獣医学DR取得	板垣慎一, 他	ポネフ王立大学(FAO-SIDAL)に, 1974年)	1944.11.26 FULL TIME
21	DR. JORGE RIJGER	PROFESOR ADJUNTO (助教)	1960.03.01	解剖・病理 生理学	1982年UNLP獣医学DR取得	板垣慎一, 他	ポネフ王立大学(FAO-SIDAL)に, 1974年)	1935.07.13 PART TIME
22	DR. ADRIANA RAQUEL MASSONE	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1987.10.01	解剖・病理 生理学	1987年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他		1963.09.25 PART TIME
23	DR. ENRIQUE FELIX COSTA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1983.03.01	同上 CEDIVE	1982年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	1959.03.18. CEDIVE: 20時/週 解剖・病理生理学: 10時/週	
24	DR. MARIA ALEJANDRA QUIROGA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1987.03.01	解剖・病理 生理学	1986年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	C/P (1990.05.08~1991.05.08)	1963.06.15 FULL TIME
25	DR. GUSTAVO OSCAR ZICCOLILLI	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.	解剖・病理 生理学	1983年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	文部省国費留学生(1991.10~ 日本在留中)	1959.07.14 FULL TIME
26	DR. ALBERTO ALMOGIDA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1988.04.01	解剖・病理 生理学	1989年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	C/P (1992.06.03~1993.05.26)	1964.08.11 PART TIME
27	DR. ROBERTO SANGUINETTI	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1978.03.01	解剖・病理 生理学	1983年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	C/P (1993.07.19~1994.04.12) 渡航予定	1959.10.17 FULL TIME
28	DR. SUSANA JURADO	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.03.01	解剖・病理 生理学	1991年UNLP卒業(獣医学)	板垣慎一, 他	C/P (1992.06.03~1993.05.26)	1965.09.28 FULL TIME
29	DR. EDUARDO CARLOS MORTOLA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1988.03.23	免疫学	1985年UNLP卒業(獣医学) 1993年獣医学DR取得	板垣慎一, 他	文部省国費留学生(1993.4~1998.3) 日本在留中	1960.10.23 FULL TIME

(注1) 職名のカタゴリー順位の次とおり: 1) PROFESOR TITULAR (主任教授), 2) PROFESOR ADJUNTO (助教), 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任) = 講師クラス),
4) AUXILIAR DIPLOMADO (助手)

(注2) UNLP = UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA (国立ラプラタ大学), CEDIVE = CENTRO DE DIAGNOSTICO VETERINARIO (チャスコムス診断センター), C/P = 本件計画カウンタートバーパート,
CONICET = CONSEJO NACIONAL DE INVESTIGACIONES CIENTIFICAS Y TECNICAS (国立科学技術研究審議会)

番号	カウンタートバー	氏名	職名	配属年月日	専門分野	学歴	指導専門家	研修受入分野(期間)	生年月日、他
(病態生理学)									
30	DR. MIGUEL ANGEL PETRUCELLI	PROFESOR ADJUNTO (助教)	鳥類病理学 兼獣医学	1977.03.01	1976年UNLP卒業	(獣医学)	坂道一、他	JICA奨励(1984年8月) C/P(1989.04.10~1989.12.21)	1952.06.29 FULL TIME
(微生物学)									
31	DR. NESTOR STANGHI	PROFESOR ADJUNTO (助教)	微生物学	1985	1981年UNLP卒業	(獣医学)	佐藤平二、他 山本正悟	学位(2か月) 7か月(2か月)	1975.02.22 PART TIME
32	DRA. GABRIELA ISABEL GIACOBONI	ブエノスアイレス州 科学委員会奨励学生	微生物学	1980.03.01	1984年UNLP卒業	(獣医学)	佐藤平二、他 山本正悟	C/P(1989.05.30~1990.03.08)	1960.10.18 FULL TIME
33	DR. RAUL OSCAR CERDA	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	微生物学	1987.07.01	1989年UNLP卒業	(獣医学)	佐藤平二、他 山本正悟	C/P(1992.01.26~1992.12.22)	1965.09.02 FULL TIME
34	DR. JULIO ALBERTO COPEL	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	微生物学	1989.02.01	1988年UNLP卒業	(獣医学)	佐藤平二、他 山本正悟	C/P(1991.08.26~1992.08.19)	1961.11.22 FULL TIME
35	DRA. MARISA ANDREA AMOR	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	微生物学	1988.03.01	1988年UNLP卒業	(獣医学)	佐藤平二、他 山本正悟	C/P(1990.05.08~1991.05.08) 1993年2月より1年留休職	1964.05.06 FULL TIME
36	DRA. FABIANA ALICIA MOREDO	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	微生物学	1983.03.01	1982年UNLP卒業	(獣医学)	山本正悟、他		1967.11.07 FULL TIME
(遺伝・生物物理学)									
37	ING. FERRANDO NOEL DULOUT	PROFESOR TITULAR (主任教授)	遺伝・生物 物理学	1988.10.01	1986年国立トクママン大学 卒業(生物学)			ライデン大学 オランダ (客員教授として 1985.01~08)	1940.02.04 FULL TIME
38	DRA. ALEJANDRA ULRICH	PROFESORA ADJUNTA (助教)	遺伝・生物 物理学	1989.10.01	1986年UNLP卒業	(生物学)			1962.12.20 FULL TIME
39	DR. CARLOS DANIEL GOLLJOW	ブエノスアイレス州 科学委員会奨励学生	遺伝・生物 物理学	1991.04.01	1989年UNLP卒業	(生物学)		カマリア大学カマリア校(1年間)、カマリア校 カマリア校(2月)	1965.12.18 FULL TIME
40	DRA. MARIA ATILIA GOMEZ	ブエノスアイレス州 科学委員会奨励学生	遺伝・生物 物理学	1991.04.01	1986年UNLP卒業	(生物学)			1962.11.26 FULL TIME
41	DRA. ANA MARIA ISABEL SEONE	ブエノスアイレス州 科学委員会奨励学生	遺伝・生物 物理学	1990.04.01	1989年UNLP卒業	(生物学)			1965.06.12 FULL TIME
42	DR. MARIA MERCEDES LOJO	PROFESORA ADJUNTA (助教)	遺伝・生物 物理学	1978.06.01	1976年UNLP卒業(生化学) 1983年生化学DR取得				1952.01.13 PART TIME
43	DRA. ALICIA GRACIELA ANTONINI	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	遺伝・生物 物理学	1976.03.01	1979年UNLP卒業	(獣医学)		C/P(1993.04.15~1993.06.11)	1955.04.09 FULL TIME
44	DRA. PILAR PERAL GARCIA	JEFA DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	遺伝・生物 物理学	1983.03.01	1982年UNLP卒業	(動物学)		スエデン、コペンハーゲン大学(1986.11~1987.02)	1956.09.24 FULL TIME
45	DRA. MARIA CECILIA GORTARI	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	遺伝・生物 物理学	1984.03.01	1987年UNLP卒業	(獣医学)			1963.01.25 PART TIME
46	DRA. SILVANA NORA MILLOCO	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	遺伝・生物 物理学	1991.03.01	1987年UNLP卒業	(獣医学)			1961.05.01 FULL TIME

(注1) 職名のカタゴリーへの順位は次のとおり: 1) PROFESOR TITULAR (主任教授), 2) PROFESOR ADJUNTO (助教), 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任=講師クラス), 4) AUXILIAR DIPLOMADO (助手)

(注2) UNLP=UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA (国立プラタ大学), CEDIVE=CENTRO DE DIAGNOSTICO VETERINARIO (チャスコムス診断センター), C/P=本件計画カウンタートバーパート, CONICET = CONSEJO NACIONAL DE INVESTIGACIONES CIENTIFICAS Y TECNICAS (国立科学技術研究委員会)

番号	カウンタートバート氏名	職名	配属年月日	専門分野	学歴	指導専攻	研究受入分野(期間)	生年月日、他
(遺伝学・生物演進学) 続き								
47	DRA. MARIA PIA HERAS	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.07.01	遺伝・生物 細胞学	1987年UNLP卒業(動物学)		C/P (1992.06.03~1993.05.26)	1959.09.22 FULL TIME
48	DRA. CLAUDIA ALEJANDRA GRILLO	アエノスアイレス州 科学委員会委員長	1990.04.01	遺伝・生物 細胞学	1988年国立マドリード大学卒業 (生物学)			1965.05.16 FULL TIME
49	DRA. MARIA LAURA CIARIELA	CONICET 奨学生	1991.04.01	遺伝・生物 細胞学	1987年UNLP卒業(生物学)			1963.05.06 FULL TIME
50	DR. GUILLERMO GIOVAMBATTISTA	アエノスアイレス州 科学委員会委員長	1990.04.01	遺伝・生物 細胞学	1989年UNLP卒業(生物学)		7/2/93 病院 初任(2名) C/P (1991.03.31~1992.03.28)	1965.09.30 FULL TIME
51	DRA. MARIA CRISTINA TERREROS	CONICET 奨学生	1989.08.01	遺伝・生物 細胞学	1980年UNLP卒業(人類学) 1989年自然科学DR取得			1954.11.23 FULL TIME
52	DR. JULIO CESAR DE LUCA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.02.01	遺伝・生物 細胞学	1981年UNLP卒業(動物学) 1987年自然科学DR取得			1956.10.10 FULL TIME
(生化学)								
53	DR. ANGEL CATALA	PROFESOR TITULAR (主任教授)	1986.05.01	生化学	1963年UNLP卒業(化学) 1965年化学DR取得		コロンビア大学(1974~1976)	1938.05.25 FULL TIME
54	DRA. ROSANA ZANELLI	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1987.06.01	生化学	1985年UNLP卒業(生物学)			1960.09.01 FULL TIME
55	DR. ALEJANDRO PALACIOS	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1985.03.01	生化学	1985年UNLP卒業(獣医学)		C/P (1991.07.29~1992.07.22)	1962.02.08 FULL TIME
56	DRA. VIVIANA ANGELICA PIERGIACOMI	UNLP 奨学生	1987.03.01	生化学	1986年UNLP卒業(生物学)			1960.11.21 FULL TIME
(生理学)								
57	DR. EDUARDO MARIANO ZACCARDI	PROFESOR TITULAR (主任教授)	1948.10.01	生理学	1951年UNLP獣医学DR取得			1928.02.19 FULL TIME
58	DR. JAVIER HUGO BARRAGAN	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.07.01	生理学	1987年UNLP卒業(獣医学)			1959.04.23 PART TIME
59	DR. MAXIMO BABUSCI	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1973.03.01	生理学	1970年UNLP卒業(獣医学)			1944.05.12 PART TIME
60	DRA. CLAUDIA MARCELA TITARELLI	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1986.03.01	生理学	1986年UNLP卒業(獣医学)			1962.11.19 FULL TIME
61	DR. CARLOS EDUARDO RAMIREZ	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1983.03.01	生理学	1980年UNLP卒業(獣医学) 1988年獣医学DR取得		SLIPPERY STATE COLLEGE, ハリウッド(1982.01~03) C/P (1991.07.29~1992.07.22)	1957.09.04 FULL TIME

(注1) 職名のカタゴリーの順位は次のとおり: 1) PROFESOR TITULAR (主任教授), 2) PROFESOR ADJUNTO (助教授), 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任=講師クラス), 4) AUXILIAR DIPLOMADO (助手)
(注2) UNLP=UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA (国立ラプラタ大学), CENTE=CENTRO DE DIAGNOSTICO VETERINARIO (チャスコムス診断センター), C/P=本件計画カウンタートバート, CONICET=CONSEJO NACIONAL DE INVESTIGACIONES CIENTIFICAS Y TECNICAS (国立科学技術研究評議会)

番号	カウンタートバート氏名	職名	配属年月日	専門分野	学歴	指導専門家	研修受入分野(期間)	生年月日、他
(実務実験動物学)								
62	DRA. CECILIA CARBONE	PROFESORA ADJUNTA (助教授)	1973.03.01	実験動物学	1972年UNLP卒業(獣医学)	興水 彦井洋 松本耕三、他	実験動物研修、イギリス C/P 1993.04.15~1993.06.11)	1950.07.15 FULL TIME
63	DR. DANIEL HORACIO MORALEJO	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1990.03.01	実験動物学	1988年UNLP卒業(獣医学)	興水 彦井洋 松本耕三、他	C/P (1992.06.03~1993.05.26)	1982.01.25 FULL TIME
64	DRA. MARIA DEL PILAR LILIA CAGLIADA	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1991.03.01	実験動物学	1988年UNLP卒業(獣医学)	興水 彦井洋 松本耕三、他		1961.06.05 PART TIME
65	DR. MIGUEL ANGEL AYALA	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1989.03.01	実験動物学	1988年UNLP卒業(獣医学)	興水 彦井洋 松本耕三、他	C/P (1991.03.25~1992.03.22)	1963.01.29 FULL TIME
(チャヌコス診断センター)								
66	DR. JORGE ROBERTO ROMERO	PROFESOR ADOJUNTO (助教授)	1979.04.01	寄生虫学	1978年UNLP卒業(獣医学) 1991年獣医学の取得			1954.07.08 FULL TIME
67	DRA. MARIA T. ARISTIZABAL	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.05.01	血清学	1989年UNLP卒業(獣医学)			1965.06.11 FULL TIME
68	DR. ENRIQUE FELIX COSTA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.05.01	病理学	1982年UNLP卒業(獣医学)			1959.03.18 FULL TIME
69	DR. ALEJANDRO RAFAEL VALERA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.	ウイルス学	1982年UNLP卒業(獣医学)			1957.08.23 FULL TIME
70	DRA. LUCIA ARGENTIO	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1986.	細菌学	1982年UNLP卒業(獣医学)			1958.09.14 FULL TIME
71	DR. GABRIEL TRAVERIA	JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任)	1990.09.01	細菌学	1989年UNLP卒業(獣医学)		C/P (1992.06.14 ~1993.05.13)	1963.03.28 FULL TIME
72	DR. GUILLERMO A. MATIOLLI	AUXILIAR DIPLOMADO (助手)	1991.04.01	生理学	1990年UNLP卒業(獣医学)			1965.09.17 FULL TIME
(名見察)								
73	DR. HORACIO ROBERTO GARCIA VALENTI	ASESOR AL PRESIDENTE		視察	UNLP卒業(獣医学)		C/P (1988.07.24~08.07)	
74	DR. ALBERTO RICARDO DIBBERN	DECANO, FAC. DE CS. VETERINARIAS		視察	UNLP卒業(獣医学)		C/P (1990.04.21~05.14)	

(注1) 職名のカテゴリーの順位は次のとおり: 1) PROFESOR TITULAR (主任教授); 2) PROFESOR ADOJUNTO (助教授); 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任=講師クラス);
(注2) 4) AUXILIAR DIPLOMADO (助手); 1) PROFESOR TITULAR (主任教授); 2) PROFESOR ADOJUNTO (助教授); 3) JEFE DE TRABAJOS PRACTICOS (実習主任=講師クラス);
UNLP=UNIVERSIDAD NACIONAL DE LA PLATA (国立プラタ大学) CEDI=CENTRO DE DIAGNOSTICO VETERINARIO (チャヌコス診断センター); C/P=本件計画カウンタートバート;
CONICET = CONSEJO NACIONAL DE INVESTIGACIONES CIENTIFICAS Y TECNICAS (国立科学技術研究評議会)

(参考7)

カウンターパート研修員一覧

1. 所属研究室
2. 研修先
3. 派遣期間
4. 研修内容

研修生名

- | | |
|---------------------------------|---|
| 1. Dr. Miguel Angel AYALA | 1. 実験動物学
2. 国立予防衛生研究所
3. 93.03.25~92.03.22
4. 実験動物の微生物学的モニタリング |
| 2. Dr. Daniel Horacio MORALEJO | 1. 実験動物学
2. 徳島大学
3. 92.06.01~93.05.26
4. 実験動物の遺伝的モニタリング |
| 3. Dra. Cecilia L. Di LORENZO | 1. 原虫学
2. 帯広大学
3. 91.01.13~91.12.20
4. トキソプラズマ原虫及びバベシア原虫の抗原解析 |
| 4. Dra. Cecilia Maria VENTURINI | 1. 原虫学
2. 帯広大学
3. 90.03.05~90.03.04
4. トキソプラズマ原虫感染における免疫的解析 |
| 5. Dr. Miguel Augel PETRUCCELLI | 1. 病理学
2. 東京大学農学部
3. 89.04.10~89.12.21
4. レクチン組織化学及び電子顕微鏡操作 |
| 6. Dr. Jose Ignacio AGUIRRE | 1. 病理学
2. 東京大学農学部
3. 91.07.29~92.07.22
4. レクチン組織化学及び電子顕微鏡操作 |
| 7. Dra. Maria Alejandra QUIROGA | 1. 病理学
2. 東京大学農学部
3. 90.05.09~91.05.08
4. 免疫組織化学及び電子顕微鏡操作 |